

洋学文庫
 文庫 8
 A 30
 2



警水先生隨筆卷之九^十



大槻文庫

○澗巷漫録上

房総兩國の畠濱等より七海多の稼漁業多き中陽月
と姓とて所年身月を限る獵舟魚舟舟舟仲夏に魚
多業盛く季秋と是を止る片濱と云々房州は
都七四郡濱多東方より至る長狭郡西の方を
朝夷郡之内村名繁多し七鎮より子累り船夫
船名美村建一船僅り南水と云わたり方角の山
着るを南と云南に着ると山と云是を舟の流り依り
舟行る。山の別名多し千原といふ夫より平釜忽り
村と續り南と小溝と隔る馬場が山銀地水と大

一村一列の事と那事此れを願まら非一よ
つて一書またり組屋村中包文とん千倉浦集南系船
あるをを初て有石り多良其舟死の割をぬし都屋
岸十條彼舟（送海し）と七澳船二艘僅し南系船の何
り（考る）四多難日あるし。風波荒く彼舟と相ひり此
小舟了しととあかしく漸減して一倍を餘りり岸
思しくま

蒙

賜 未采拾依已領感

恩不淺未論一切已

悉知但旋地不好

更兼無蓬無舵

懇祈速收入港則

感比奉

覆

南京船主沈敬瞻

重日中程航く暮り及り此れを各洋候主れと申候。波
を少舟も出初しく明々と待て。二日、船より軽舟風強く
已の刻より雨降おし午後と度已風より一時化の如し
濠洲日暮、一海船有北と程漸大水中二艇は交海初め案
固を知らぬ風波のよひ懸錫も切て淘りれあかす白
れをかせん。これと浪のうやう。よまをり候申の刻
斗千原の機傳目高て。海にまをる船其を平穩件
者等の教多打鳴し叫聲風下候てすは至り海く少

一ツれを二ツの女を運き異し無船より何れんと瀆
急居居る者も急家と退き一村の中里離れざる而縁
の才たざるはとなく彼舟打擲る者かれ者との
増多のいやあしといふ所あるがれされ中の方より
さうぞん或る鐘物といふ聲れより土地の分所事ハ
諸くる山に夜にり飢寒とさすさそと焼火取ら粥
味増汁おとさめを彼舟(をす)せんゆま百石厨余洋
受波音くし舟ゆまか海に練の者も海にぬれさす
脚ぬれぬ天よりさぬく舟船中いうおまひん噂
者あつめやま一人遊と渡る度必死と見(た)中の方
よりゆまの働能者と抱上火よりあそり体と見て焼
殺まじや思やらん又船中諸立れ七暮り及りあす

以者を通して日弁の地あるとあり也いふる根を
見せられしを急めくと海に來者二十有六人也暗夜
あしに波荒く海に自ら抱と眼を閉聖物皆く出
れ之に渡一人救を向りて七十八人也細を云す
入る早き也(と尋れ)る船中飢寒の瘡も也
あしきる何と云は漸奪を老可しり也云行

函書

重問

何國何處何至故

答

唐人君 李粟

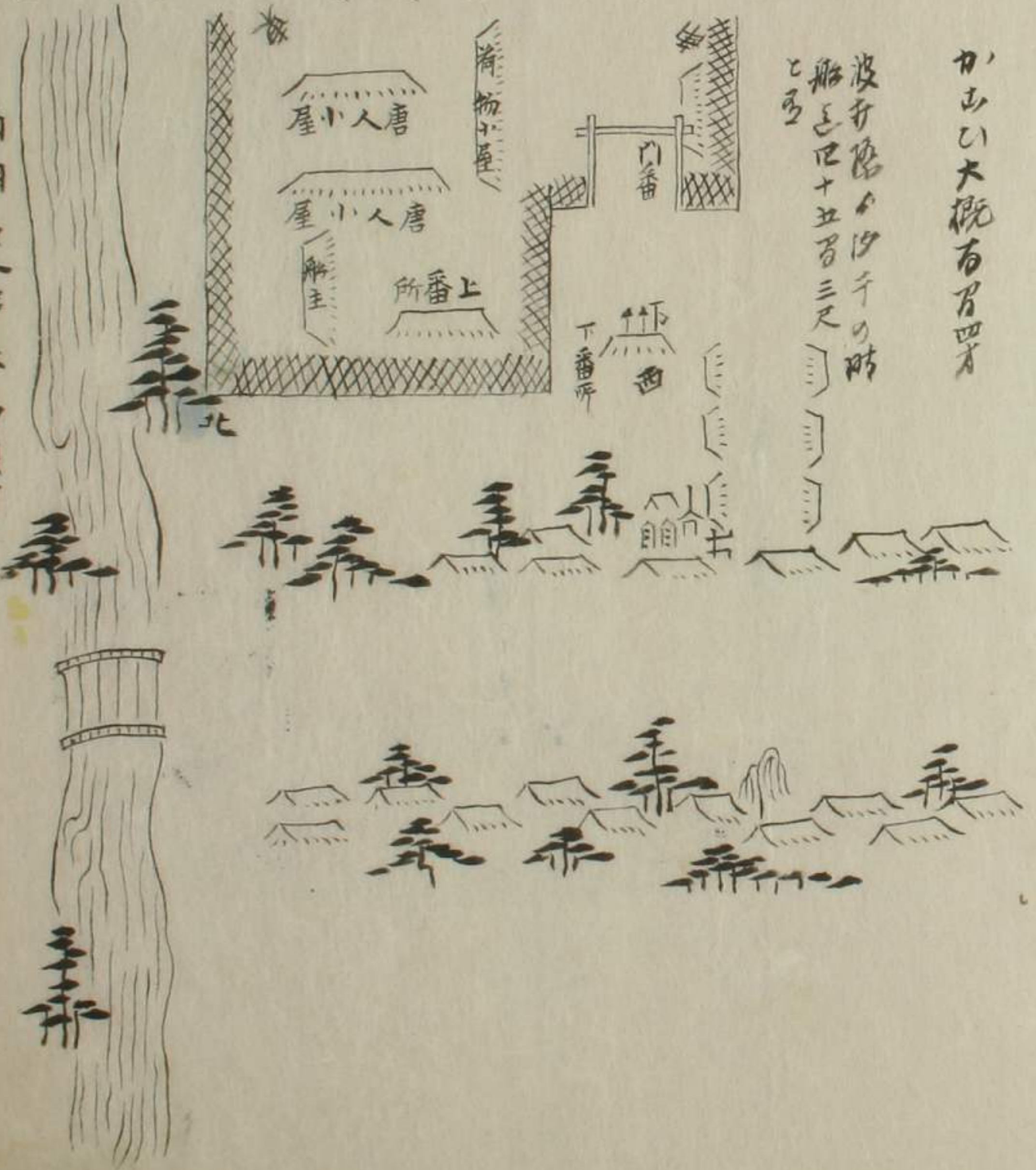
秋國皇帝乾隆

秋是天民往日本長
寄辨銅旧年十月廿三日
大洋失舵故處到貴國

四十四年十月十七日出
船二十一日失舵漂流
到處地
當時の差是のま
り信り



南朝夷水野家所領分



かゝい大概百四
没舟路の四千の時
船は四十五百三
と云



平館村

千倉村唐人

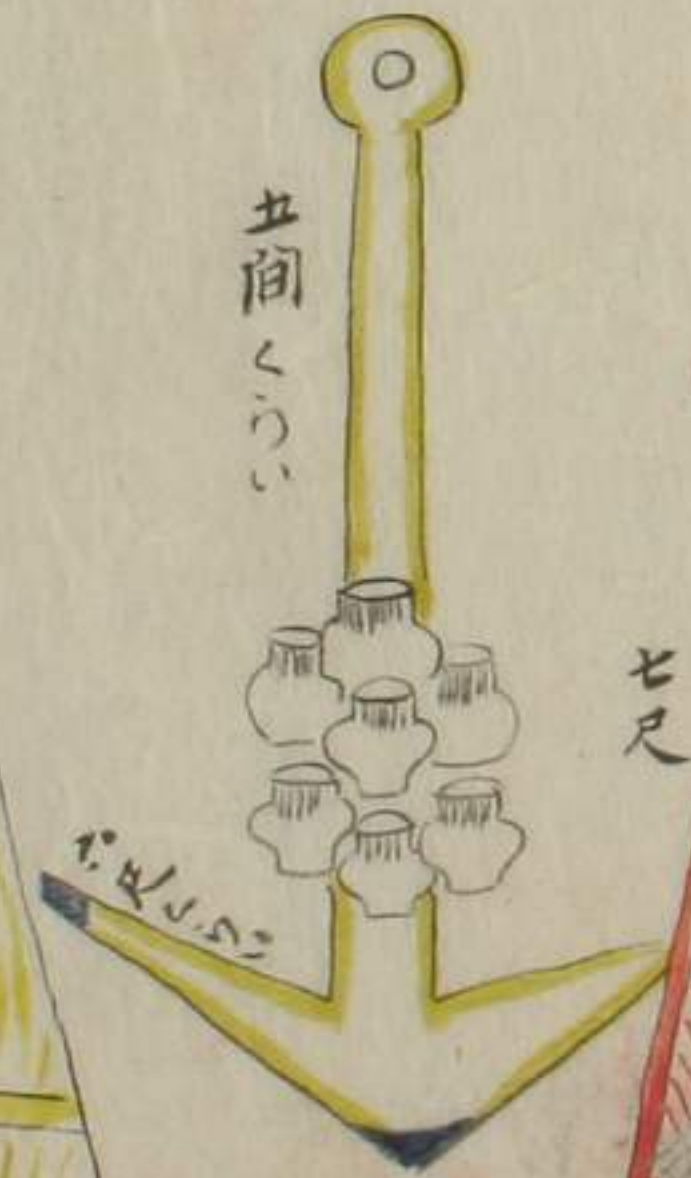
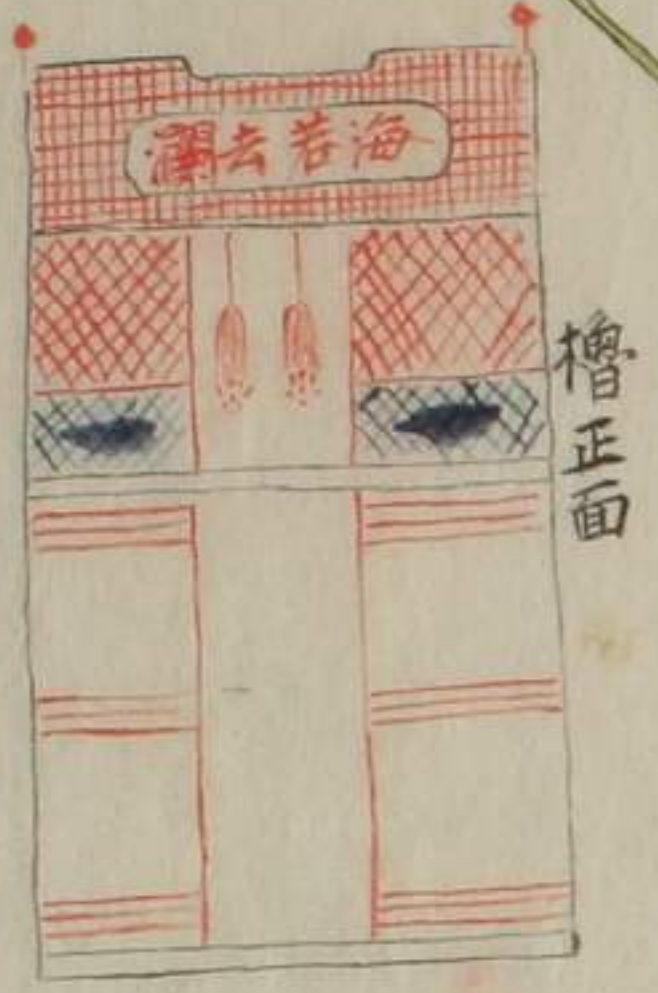
小屋場大橋

なと川

砂濱

三川と

此舟の形を屋船中著敬す



大所磚大小ニ有
ヤ碇カモユ

二尺六寸

南京船図大概



船丈

西味二十三間端より端まで
二十五間

横内法

七間
外法八間二尺

深

七間

帆柱大小四本

中の帆柱十二百以迄の帆柱四本以上二十間根で
八尺三寸半の帆柱の帆柱を二十七根とすさいわく
とつと実をあらむ
若柱十二百以迄の帆柱三間以上十五百根を
五尺半の帆柱の帆柱を五本とす
小柱前後二十丈の帆柱本を一尺七八寸と
す
檣の皮動きと見ゆ

碇

大碇は三ツウチ一尺四寸半長さ百斤餘
小碇は平く三ツ組長さ百斤
碇の籠石を大概一斗八くらひと見ゆ
沈石木とゆれと産をあらむ

楫身本中の柱と同本 船具大概杉檜具楳の乾 舟板厚サ寸
二一渡一尺半の鋤四ツ一尺三寸半の桶銅太鼓一ツは

舟中かき引の
左具と見(左)

何れも至沙汰血園は郷考其と北く特と北く尋
すなり水も日夜の歩行をく北からむと主禮と
難説やあしとすし己あり何そととと漂着の物
種何れとも誰か実を知らず且と老人め婦小
童の度すいたるありたむに之は輩すあといふさ
海と見せやと彼人との形と字をたのこし







漂着の江舟見多の款領主(許)領主

公儀(安上屯白の陶唐人とも)省在舟舟の扱を積居の
 荷物打浦を此より是ともて之免勝浦勤番地也
 かり及人中指岡を江南系人の在舟舟を撰る事か
 場大概大百間餘四日か八日と多し何りよしおある
 其白領主が好味なりひは款國より地事を行
 彼地(若早速唐人居舟舟)移置まじりし九のり
 舟移置を夫か日との事遊船主沈敬膽財副顧
 寧遠南人を差書賣船は在遠而きり舟中知ありて
 房総兩國支配所代官稲垣藤左衛門及西をからひし
 て五月十八日千原(省支)控最重はして南京人
 のまじりとし免垣の外(出さ居る)めを公のり

大急なれも南系人故藩の久しき故に此州の人ゆき
 形と見せと往來群集するに如れと云ふに
 云々知れり多々村因を及り四方に三千里言わ
 るに在りし

控
 南系人居りて
 交の者なり
 此の者なり
 正寄るなり
 あり
 稲垣者なり
 五月日

荷物積居の物吟味の交に違ひなきは彼船を以出船

いふに(き) 所不知何れとも船方彼在浦野江戸予
 房田の船大工との船千人の集り此舟修覆と信
 り得る造作物と信譽して信り船をこの地
 ほととに別船とて長崎へも在送と船長へ
 在船長の居る任を為の言 唐人 おく船云舟舟
 江戸知所 三丁目と毎や 久を居る(と在舟先者たる
 者より) 在船の船五千人 着の者百人 同在り
 十百千居る相ま十日の地 船五千人 市橋二人 船居
 二十二人 十十九日 打破日 船八日の内 雨屋多く
 信りて仕業すくぬし 船五千人 山風船吹く
 船をちりくと 船五千人 申の刻 船居 船を交
 (雨をけし) 船五千人 船五千人 船五千人

を有せしと此夜風浪のたえし微塵と事舟板お
ほくはあかぬ形見(有り有り)或は砂濱(あかたの
ゆま帆柱は二所を下南船長の瀆(よる人)是を以
是河あなる船は一浦と下は泥の(モリヤ)引
上る子を有は是は漂着以後の淘あそしあり
唐人(おし)船は海舟の巻(り)して三艘也 三十二百川
三十一百川
唐人ともニツと大舟(三十人)中(多)人(四十人)
有物等を二艘(積)舟は南系(人)のそよ(依)る
彼舟の帆柱物船板(お)いた(り)して長崎(は)に
送(り)し(り)の所(下)知也大舟一艘運賃金(二)百(十)支
七船百(十)支(と)の(等)千(支)と(湊)此(く)船(切)り(要)す
言(は)は(し)海(上)十(支)船(何)所(の)言(の)言(と)い(知)る

大船(船)を(有)し(る)有(る)羊(摺)と(名)付(る)舟(十)舟(は)艘
と(以)て(大)船(一)艘(有)す(と)の(所)下(知)也(同)二十九(の)唐人
有物(而)故(主)船(柱)は(南)系(主)代(り)海(流)浦(船)は(力)
元(二)人(領)主(の)事(行)は(三)支(主)代(り)事(有)付(き)船(の)
子(年)船(船)は(川)の(主)代(り)今(年)の(知)舟(是)舟(船)は(一)
少(り)く(南)系(と)大(船)と(や)人(の)言(の)信(り)見(ゆ)れ(と)
舟(の)こ(と)も(ぬ)か(る)船(柱)と(り)船(の)有(場)を(感)し
帰(船)の(飲)此(地)の(信)係(と)作(き)て(決)僅(し)も(の)も(と)唐人
送(り)船(船)は(一)七(領)主(を)送(り)人(石)の(人)と(下)七(人)と(し)
一艘(二)人(組)少(船)一(人)二(艘)と(下)十(人)長(崎)引(船)の上
乗(と)し(七)箱(櫃)は(島)長(代)と(下)十(人)と(一)艘(一)人
と(上)十(人)也(浦)長(と)力(元)と(下)十(人)と(一)艘(一)人

居りて夫より浦松（帰見）を以ての寄船を以て舟師の
 船を新造しり此より一日を待たざるの寄（船師）
 の船大船より出帆見しと云ふ人甲申日千倉の
 藤若（帰大舟）より出帆と云ふと順風ありて舟の更
 引しき也

七月移る南島人居る引拂同する船師藤若より寄
 船千倉混雑船を以て寄船若と千倉十二所
 ありて高市田村元長より寄船若也大船帆柱構木
 或は船板寄五集積と云ふし寄の寄船を舟より引る
 と船垣若より人願まの舟より舟人お願若と云
 也（舟具若若也）舟の寄の寄（若若千倉の寄船若
 と云

船板おのり（の分）沙入の舟州山歸来舟の分は舟の
 五集積の寄舟也舟板の分寄舟舟下寄舟と
 ニイヶ村（下寄）

南島の寄舟の寄物は寄船と云ふ舟師の寄物
 一（在）寄舟の寄物見分の品寄船と云記也

- 舟州 二十貫目格 土衣差 二十貫目格 此二品は下寄也
- 舟州 一千二百七十 毛氈 十枚 舟の寄
- 緋綿 四十石 人蓑 十枚 舟の寄
- 書物 二百石 象牙 四寸 長三尺 舟の寄
- 焼物 四系 舟の寄
- 酒瓶 二斗 舟の寄
- 沙糖 氷沙糖 舟の寄
- 織物 舟の寄

繪商人と見ゆ者全無取持
 多持居の道具を以て珍者不多只此の紙筆子産し
 かく一依し異に見合凡多の言ふ七番を忘りて唐船
 出帆の時と大抵積荷四五千石目程の増れ此と
 漂着長形船中潮う初は在り守すに至り持り為
 白雲の石平作同と至る目録石目了積り潮二
 百五十石の五との五枚此外九足積一西漂海飯餅
 ありて八足積一足を食し一足船中持りたるを
 唐人の船に傳りて五枚の書ひのう、思ひん船中
 船中地は海を
 南系人達あり石目入用人目外人と通せりるに似つて
 中つてりて諸人取寄ると一書と云ふ可し持りたる

皆く新氣作古積也是を中や五七の市別禁此れは
 凡と云ふ一書見見る事と一書取寄りたる

漂着の市乗各人数名なり書出さる書出さる(きり)
 〇作海の方長崎者書上の帳面字名出ると一則
 標顯通船人名冊と云ふ

船主	沈敬瞻	年四十二歳	蘇州	杞媽祖
財副	顧寧遠	年三十九歳	松江	全
副船主	方西園	年四十五歳	新安	全
縣長	蘇孟堪	年四十歳	厦門	全
総管	林天從	年二十九歳	福州	全

通船人数計

船工
全
全
目侶

鄭朝聘	陳友當	陳伯俊	周柔使	陳丕光	王太山	林得海	王廷顯	李達使	童兩使	尤廷玉	簡得意
同三十三歲	同三十歲	同二十八歲	同三十二歲	同三十七歲	同四十三歲	同三十七歲	同四十二歲	同三十八歲	同三十九歲	同四十四歲	年四十三歲
全	全	全	全	全	廈門	全	全	全	廈門	浙江	廈門
全	全	全	全	全	全祀媽祖	全	全	全	全	全	全

張清弟	善得傳	陳未福	陳尚丹	林相習	林得星	朱守瀆	劉則師	張以修	李同寶	林諒使	周文使
同三十三歲	同三十八歲	同三十三歲	同三十一歲	同三十歲	同三十歲	同三十八歲	年四十歲	同三十八歲	同四十歲	同二十八歲	同四十五歲
全	全	全	全	全	全	全	全	全	福州	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全祀關帝	全	全

林天伸
林得典
陳朝華
林得祖
高潤英
陳孝五
蔡元鼎
林兵棟
劉良鼎
林良光
魏惠候
張謨弟

同三十四歲
同二十四歲
同三十七歲
同廿八歲
同三十二歲
同四十四歲
同二十八歲
同三十歲
同二十九歲
同三十三歲
同三十八歲
同二十八歲

全全全全全全全全全全全全

全全全全全全全全全全全全

劉蘭弟
劉淑遠
姜來進
王振元
林金順
鄭之使
黃魏使
黃希使
高棉使
劉良清
錢安慶
陳盪使

同三十歲
同三十四歲
同三十歲
同二十八歲
年三十歲
同三十八歲
同三十七歲
同二十六歲
同二十八歲
同二十八歲
同二十八歲
同三十二歲

全全全全全全全全全全全全
浙江
廈門

全全全全全全全全全全全全
祀三官

李礼弟	同三十歲	全	全
劉益弟	同三十歲	全	全
陳孝國	同三十二歲	全	全
紹河松	同三十四歲	全	全
周夫明	同三十八歲	全	全
尤德通	同四十歲	全	全
劉高祈	同三十二歲	全	全
陳雲卿	同四十歲	同安	全
馮賢用	同三十七歲	全	全
吳象使	同三十二歲	全	全
陳友和	同三十四歲	全	全
高尊光	同三十四歲	全	全

楊立候	同四十一歲	全	全
敦送弟	同二十三歲	全	全
鄭鳳弟	同二十八歲	全	全
劉示嵩	同四十歲	全	全
鄭子佐	同四十二歲	全	全
朱豐	同三十歲	全	全
高龍文	同四十二歲	全	全
曹永安	同四十歲	潮州	全
陳菜	同三十歲	蘇州	全
姚寸	同三十四歲	全	全
紀高	同三十五歲	全	全
王三隆	同二十八歲	全	全

庚子四月初三日在船病故

李永興	同二十二歳	全	全
王進財	同二十六歳	李江	全

通船共計七十九人内病故一人

實七十八人

安永九年五月

日南京船主沈敬瞻朱印

所長崎者船の千中若かし帳面と

二月此の乗船のとき何等の竹種や若く可なり居
 しの舟場を五所の汗列 抽竹三張 七千八百
 の櫃棒の先(一尺半程)紐とおぼしき袋を先
 持居の御四ツとち鳴らし錦の包とて種と思
 べきもの(此は月この物に物さし切せり)志をのまか

其里たる唐人希有な物と云うに記未由いゝある
 物控と聞かす日本テントウボサ大明モウツウギヤ
 と唐刀中の急事有嘉細尋よいと云はれ彼舟
 玉と名おめりや船主似不九人一没はらさしと云はる
 唐人の冠と名の白地として初め陣笠程と云ふ紅毛と
 ちり玉目音く四時星と云はる見る者程と紐と云
 左星と聞かす南京地山射本と云はると此野果と云
 其脚は生果の懸毛と云ふ一尺餘と云ふはしり是を
 晒知は染糸と云ふて程と云ふは皆汗乾也程と云
 者といふ(よも彼地より見たるもの而し席と聞かす)
 南京の地は此し心算の地と云ふと南京の地は此し
 唐人の持の物と見入て速香と云ふは此の地より云ふ此地

ウカホリ似たり... 沈香の別名... 沈香の子母... 沈香

當時切... 中位... 初列

稻垣... 射の前... 銚二筋... 袋

佐... 三人... 押... 二人... 踏... 中... 人... 拂... 子

同... 唐... 人... 居... 中... 解... 子... 一... 人

領... 主... 事... 行... 役... 陸... 軍... 部... 長... 陸... 軍... 部... 長

浦... 賀... 興... 力... 有... 人... 陸... 軍... 部... 長

長... 崎... 上... 上... 乗... の... 孫... 左... 衛... 門... 左... 代... 有... 人... 陸... 軍... 部... 長

領... 主... の... 長... 崎... を... 船... 中... 懸... 弓... の... 役... 人... 有... 人... 陸... 軍... 部... 長

...

...

...

...

...



○稻品目録

一... 早稻... 一... 早稻... 一... 早稻

一... 早稻... 一... 早稻... 一... 早稻

一... 早稻... 一... 早稻... 一... 早稻

一... 早稻... 一... 早稻... 一... 早稻

四年九月郡司より仙石御を請あり奉め祀を白書
あり同物正奉在り奉め奉り奉す
天明甲辰仲秋日 大書奉主人正礼知つす

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

○御鹿狩巻

寛政七乙卯年三月五日

御鹿狩一件

千住宿より小金原日暮村所立場と四里二十八所所

成道所普請あり橋と新規掛也

新宿川右伎橋 長拾八丁 幅三間

杉戸宿利根川右船橋元 百貳拾間 幅三間

杉戸宿松籠寺山上を新 所敷所番屋立所者し

所あり也 所初を狼煙所上ヶ川所定見也

所島にて所成を掛也

所普請也所掛り 久世丹後守

所代官 菅沼宗十郎

四方布上り道
山上八百四方

坂小富士山八間四方、布矢倉

音 五尺

四方 布手摺

多所紋付吹流

布着日前在千住 布立場子七指間毎子音張

新身を丁の向は簾掛焚取の時新布敷布着

是より布馬少七 布成を在布立場人足持口

三百ヶ布は簾掛焚取簾の中へ好しめ付在る喜

竹と焚取者も人足持殿の押巻し尖大造の

白布と指及華紙何り 爰に記在坂五ヶ園村

小幡を成る張多本右所切取上取持糸布觸

右勢子人足指方余人 實里四方に立切り中内若木右

見守極小島 少を野牧士實十人 山里而庭方

山掛り且指人糸右竹矢未八所四方の内 追込

布矢倉 大鼓の欠引 布以旗布元實百勝余在

小旗と見 布少引 追込 口立切中内 布小幡元

布法 布少引 上巻

布着日所供元

大師湯頭 い 小笠原近江守 馬 十足 三百七十五人

日 ち 松平下野守 同 三百八十一人

日 は 近藤石見守 馬 二十匹 四百八十八人

所書院為銘 に 浅野孝政守 馬 十八匹 四百廿七人

百人番隊	け	津田山陣守	馬	百
や	中興師小性亮	馬	百	九
く	中興師小性亮	馬	百	八
の	松平十右衛門	馬	百	五
の	水居兵庫	馬	百	五
う	中興師番亮	馬	百	一
う	柴田修理助	馬	百	一
む	内藤伊織	馬	百	一
ら	建戸大和守	馬	百	一
友	戸田内務助	馬	百	一
友	室賀馬書	馬	百	一
ぬ	彦坂九左衛門	馬	百	一

師佐良	け	渡部平十郎	右	同
ふ	園部因記	右	同	九
ふ	深尾八五郎	右	同	九
ふ	高橋大助	右	同	三
ふ	丸茂勘左衛門	右	同	三
こ	稻飼新三郎	右	同	八
こ	土屋源二郎	右	同	八
こ	栗山伊三郎	右	同	八
こ	新見長門守	右	同	八
江	千駄水内組	右	同	七
江	新目谷水組	右	同	七
江	新目谷水組	右	同	三

師佐備

大伴善治

あ

菅沼織子

百十人

さ

建中内匠

四百九人

き

松平但馬守

四百十三人

ゆ

大目附元

四百三十九人

ゆ二

市目守方

六百十人

市醫師

百五人

師江備

若年寄

井伊兵部大輔

馬五匹

師老中

松平伊豆守

百七十五人

一ッ橋 師嫡男孫

田中 師嫡男孫

右月誓師禁出 移戸宿 上 行方

師禁方一人

一貳尺全 二格

以湯田人

貳十人

多田人

四十人

洗原田人

四十人

火焚人

八十人

真木運人

貳十人

師飯持人

貳十人

師飯高橋守外司人

貳十人

臨時卷人

貳十人

貳貳百八十人

外 承洗人

八十人

市飯多者分凡百七拾有

中人等三百四十一人

新規酒樽人倍

市飯 四百

市赤飯 壹百

市嘉鎮 壹百

一市康五ッ

肉五ッ

五ッ

市書院番

松平伊左守

市間長四郎

小倉康之市

松浦又左衛門

若野 壹百 突為

松浦又左衛門 生捕

大倉亦太郎 生捕

日人 突為

山田老之助 突為

牧野内匠 突為

日五ッ

日五ッ

日五ッ

日五ッ

日五ッ

同

席七ツ

同五ツ

同式フ

同五ツ

同貳ツ

同五ツ

同五ツ

同五ツ

同五ツ

久世丹後守

突為

性若乃志

突為

岩本若狭守同

若田金二右同

同入 生捕

宮井三左衛門 生捕

三瀬伯耆守 突為

四手組 生捕

佐大 生捕

金澤源平 生捕

同五ツ

同五ツ

同五ツ

同五ツ

同五ツ

同五ツ

同五ツ

同五ツ

同五ツ

同五ツ

久世丹後守 生捕

山本長左衛門 生捕

同入 突為

牧野内匠 生捕

若杉内記 突為

安藤作右衛門 突為

若木小左衛門 組為

本田右衛門 助 組為

金沢源平 突為

杉本五右衛門 突為

性若乃志 突為

若木根大内記 組

同四十六
猪多ッ

同多ッ

同多ッ

同多ッ

三川口右仲代生捕

性名不立 打倒

多野橙十市

多野 大助

久保田左近 打倒

天野弥左衛門

能勢因幡守

竹本江左衛門

松平佑辰守 打倒

山谷丹后守

能勢因幡守 生捕

性名不立 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

同多ッ 打倒

江戸面柳

荒尾 幸八郎

あき

京尾 幸五郎

觀金原蒐場記

寬政乙卯春三月五日大蒐于下總州金原蓋建業以來
玉燭四照生民不知兵戈不虞之備幾乎荒於是乎
歷朝多為畋獵以講大事於農隙使士民治不忘亂豈其
淫於原獸乎而金原之蒐實始於德厝及後復廢矣
而今國家復舉之則可曠世之大舉矣而從行士大夫自
中貴人朝門羽林生長轂下未嘗之險阻矣乃今涉百里
之遠而後不測之獸則不能無虞心自後去歲今出也人
馳馬試兵日不暇給嚮役之一月先閱于駒場以肄其
事及連發火銃馬駭辟易有墮死者聞者寒心矣且巷說
相傳云獸之所觸必多死傷於是下至民徒莫不兇懼歎
慄矣已而蒐訖則唯有墮馬四五人外其餘莫有夷傷者

獲獸一百餘頭云後三日侍講於圓陵侯因言欲觀金原
蒐場侯曰寡人資子以馬且令侍醫青子憲
與俱予頓首謝辱是夕天陰乃約曰暮食齋製以味爽發
九月朔明二子以馬奴二人及隸至塾生益田融前為獠
徒縱觀其事因命為鄉導過二州橋經墨水隄上花柳蔭
路爭冶競妍亦可賞焉予疇昔與秋萬夫寺一安游焉有
詩行已可二十里諸子更騎予乃騎抵世繼村可三里下
飯村店有澮達有龜村七八里土人引小舩濟行人湫隘
不可乘矣渡中川抵新驛乃車駕所過自千樹驛走總
之孔道也津上新架一橋以濟車駕長七十武將墮半
穿橋板郵丞詔曰行自二州橋乘舩經綾瀨抵就陸而
後過此自此道橋可五里抵金所村有園臨乃稱河津津

廣里所東岸乃松戶驛也聞之行過時造舟為梁竄材筑土如坦塗焉以大木索及鐵鎖維之牢甚矣其基及舟二十三艘及木索尚在視之索析檜木絢之大溢於拱其奇觀可想也昧中舒松驛出驛阪東有息車駕處從此為金原都人士及遠近觀者憧如織村頓野毗鬻飲食於路相屬而不絕幾如都下寺祠香火日有十許里過和谷將抵金柵村路歧左右右達菟場八里許取左先觀五本樹嘗以諸將卒先行至者所嘗處也方可一井西南一門東南一門內為廬三十六坵井八所東南門外別起一廬以置鐘漏為菟場當琴佐八里許新開直經望之如繩矣金原本為牧馬之地東西四百餘里南北數十里往往作星壁以別馬羣為菟故去歲冬用人後二萬馱牧馬遷

之於佐倉六方野塹而閉之云菟場因墨而設中央筑臺高四五仞起宮其上四達方二丈計是為幕府東方下一級又起一宮一橋田安兩卿位焉臺基四方角當宮面周可二百武環以木柵又落其內每角一門西南又開一門都五門矣臺西北有一廬庖人居焉不居西門植木南向長如臺之周矩折東向五臺之周而遮濶其末掛網於是不足北門起竹落東向亦遮濶其末長與網相若而空東方其內為菟場網之與落相距三四百步周可十里諸將卒咸聽砲至自營陳于其中武總常之民徒十數萬分為七火首尾相銜圍而進焉遠者自二月廿三日一晝夜歐二十里每一火島銃三十無凡人執一文竹三尺繩各一息則植竹繫繩為藩螺鼓鈿鏡隨意持之見獸則鳴而歐

之初四日蓋進圍敵重周匝七八十里無咫尺罅隙夜百
步為一大炬張燭數萬炎熾焦天火光如星且往以舉燔
火以驚獠徒之眠為五日下午辰車駕至畧中發砲戒期
諸將卒舉出營就場其敵未聞獠徒十數萬咸斃烏銃鼓
譟而進敵歎於場中而乘壘矣呼聲動天地於是周圍可
四五里矣其入網者將卒咸斃竹槍逆而斃之其奔網外
卻地者牧士五人騎而斃之網中牧士營牧馬庶人在官
者卻地在網南圍中廣輪四五里幕府親斃鹿五頭執
政以下所獲鹿野猪狐狸之類一百餘頭未牌蒐訖
車駕出網南而還扈從諸官皆在卻地之西不與於蒐焉
云此皆道聽塗說不足取徵焉唯是擇錄其稍近人情者
亦萬分之一也已還過金柵村出原路下晡復飯松戶令

益田生騎予三人携一奴賃舟下刀祇十里過國府臺里
見民故城距也丹壁十數仞臨河如屏障都人所稱真間
楓樹在此日已暮矣不得登覽賦一絕而去過市川津有
劇十五里抵行德時雲散月清偃卧舟中諷詠相和而去
甚有興致焉十五里捨舟渠而乘舟步抵小松川驛有津
曰逆井乃中川也又賃舟入繼川自此為本莊十餘抵二
州橋上陸適聞九鼓此二子別京橋歸水谷街橋居益田
生歸已久矣

〇後系部
 興旺君樣所入樽之布
 所持糸之布雜色目録有
 〇後系部
 興旺君樣所入樽之布
 所持糸之布雜色目録有
 〇後系部
 興旺君樣所入樽之布
 所持糸之布雜色目録有

清雜色目

一束帶

一對

男

冠

滿紋

袍

紋裏唐系

單 紅紋玄蓑

下 龍衣 浮綿綾 裏玄遠蓑衣

表 袴 着丸 裏紅衣

大 巾 紅

小 袖 着綾

石 帶 有着丸鞆

太 刀 薙画尾長身 金作

平 緒 紫版

笏

檜 扇

女

帖

摺扇

襪

白練

五衣

紋山吹丸

山吹丸二領

崩木白衣三領

表著

紅梅裏增

龜甲浮織物

表紋箱形牡丹

唐衣

蕨芳

龜甲浮織物

表紋鳳凰丸

掛帶

繡物唐衣

裳

打底

纹小葵
浓寺

单

纹草菱
红

袴

绫红寺

小袖

红梅
红梅折枝

附帯

摺箔

帖紙

细面

襪

赤らあや

一布袴

一對

男

冠袍單

滋紋

赤色

紋算中葉八葉

紅五葉

袍

紋小葵

紅打

同

紋小葵

二領

層色

下龍衣

浮綿綾

裏五透菱層紫奇

袴費

層色後丸

女

下袴

白

小袖

志々綾

石帯

無紋巡方

太刀

野太刀螺鈿髹漆
金作革縮

笏

檜扇

帖帋

榴笏

小掛

白龜甲浮織物
表紋尾長鳥

單 紋草菱

袴 紅

小袖 紅梅

紋梅折角

附帶 古里毛

帖帛

一直衣 一對

細面 襪 白綾

男

冠 滋紋

女

直衣

外蝶
裏紫

衣

紅打
紋小葵

單

黃
五遠菱

指貫

薄包卷丸
小結

下袴

紅

小袖

白綾

檜扇

蘆芳

帖帟

襪

白練

小褂

薄紅梅
小葵浮織物
表紋梅折枝

衣

紋小葵
紅折

單

青
紋幸菱

袴

紅折

小袖

紅梅
梅折枝

附帶

摺
竹泊

帖帛

細面

襪

白練

一衣冠

一對

女

小褂

紅
龜甲浮織物
紋
玳瑁

襪

白練

帖帑

檯扇

小袖

白綾

男

冠袍單指費

滋紋

紫香襪

單

喜
紋
辛
菱

袴

紅
打

小袖

濃
紅
梅

梅
折
枝

附帶

摺
竹
酒

帖
帑

細
面

襪
白
練

一
小
直
衣

一
對

男

玄
馬
帽
子

女

小袖 白綾
 末廣
 帖紙
 襪 白練

小直衣 松色
 紋 松丸
 衣 紅梅
 紋 松丸
 單 黃菱
 指貫 紫龜甲
 下袴 紅

細長

白
龜甲浮織物
老紋赤丸

小袖衣

紅梅
紋梅折枝

圓

紋
折

附帶

摺
箱

帖帑

細面

襪

白練

以上

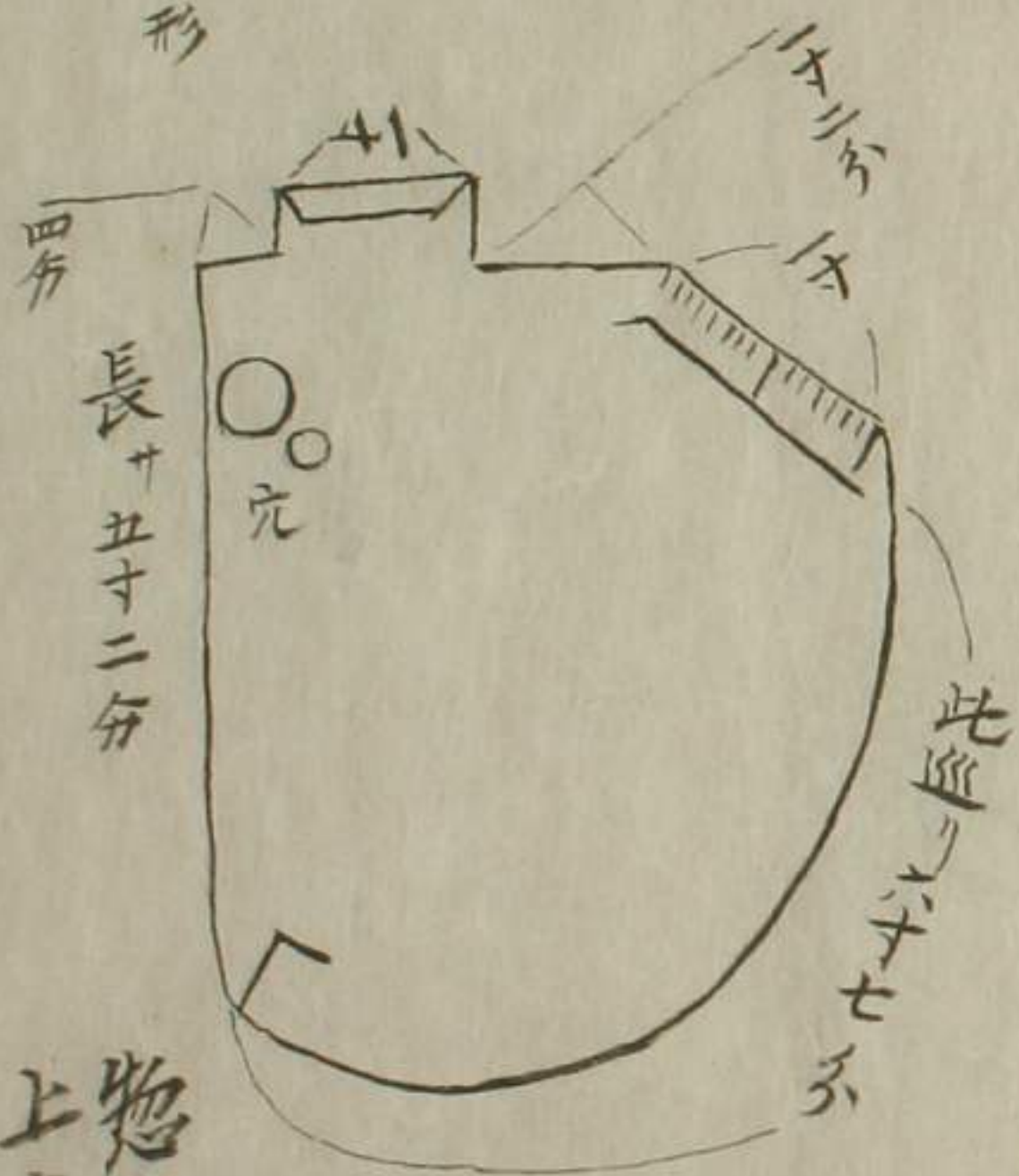
磐水先生隨筆卷之十一

○澗巷漫錄下

天明四年讚州の者磁屋吉多席ト云々の持来

此二品伊丹藩本氏
権平ト云人ト云
借り摸写し
其の中五六年
のころ

元大キサマレ形

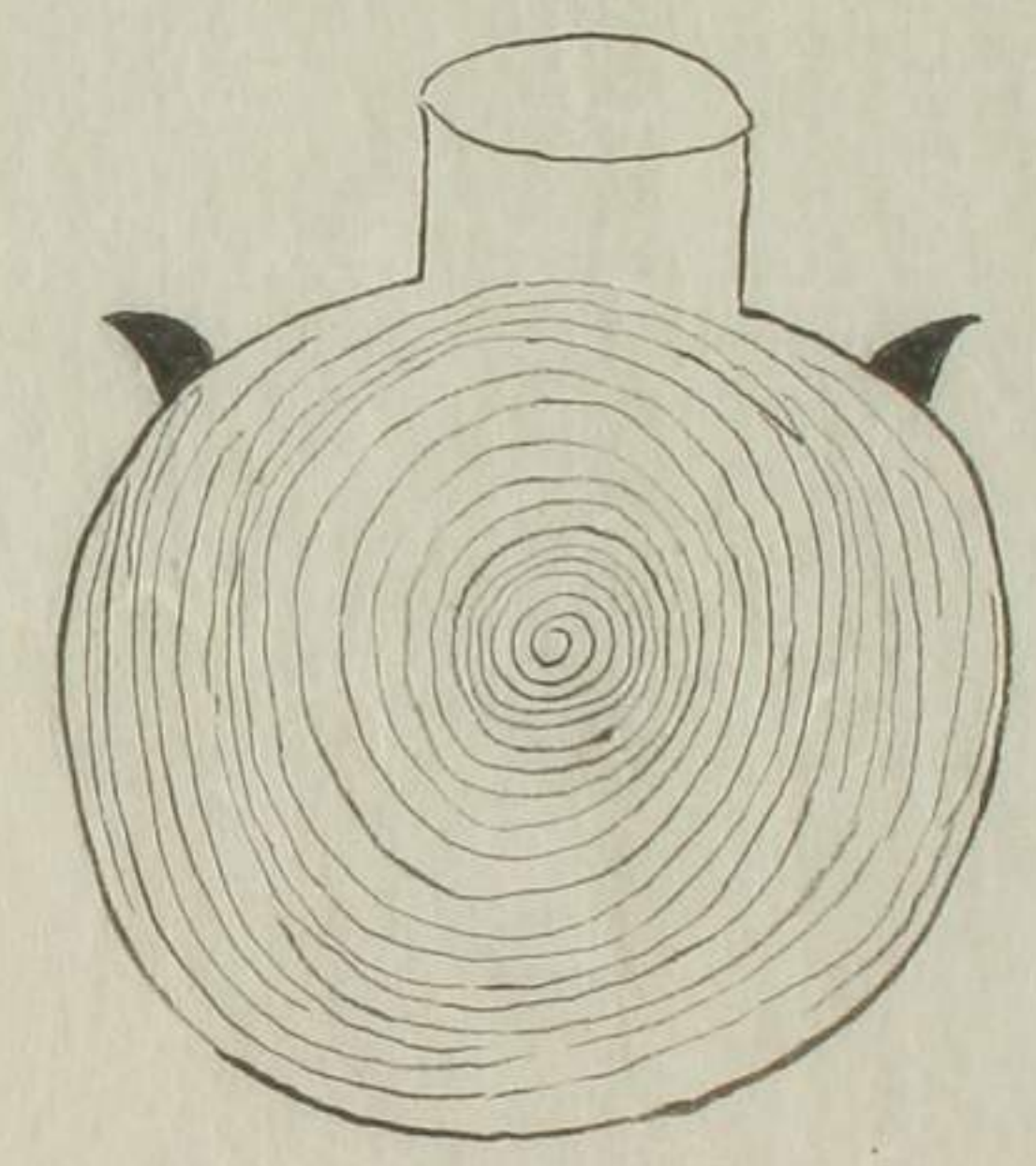


形図ノ通厚サ真分

惣躰鉄ニ右面有古
上古ノモノト見ユ

内青瑪瑙の曲玉一ツ入大ヤ知図

不詳



高六寸四分
胴徑四寸九分
口徑二寸
鱗口形両面ハツシリ
厚サ三寸三分
無灰上ニ品
薄黒色

内空

江州金勝中村山石空出ツ

惣高サ二寸五ト三本徑三方(五)

径

口欠テナレ

丸キ所高サ三寸六ト足長サ二寸六ト

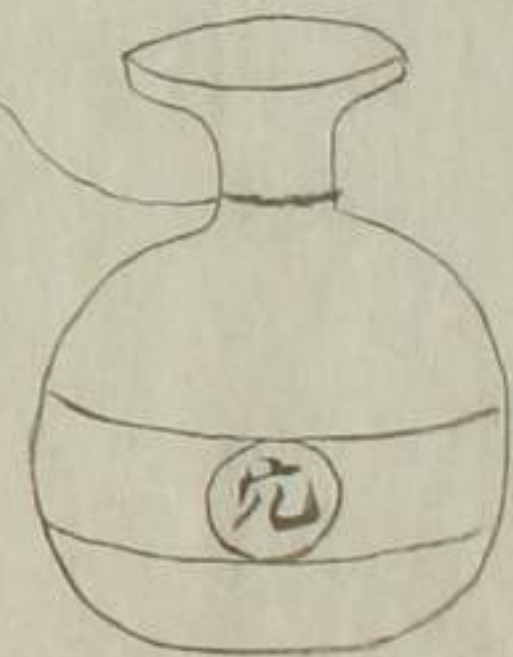
丸キ所徑五寸 足大ヤ九ト

白色大ヤキ至テ堅シ



近江鏡山
内大谷

内空

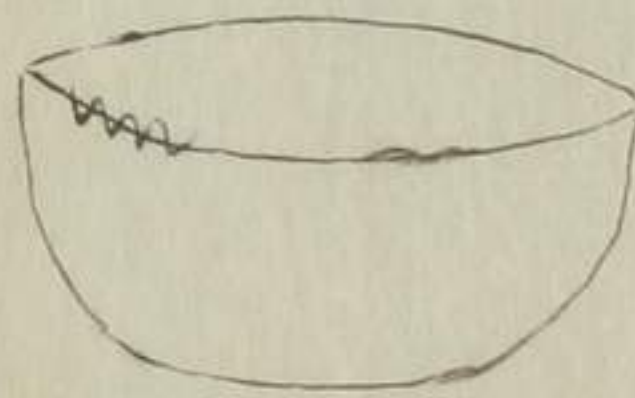
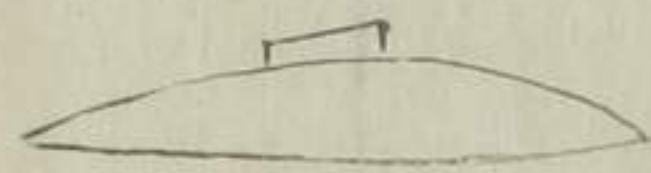


口欠テ漆ニテ次ク

高^ナ 蓋^ハ 五寸九ト
径 二寸
口徑 壹寸貳分
一穴アリ 穴徑 四ト第
大ヤキ 單色

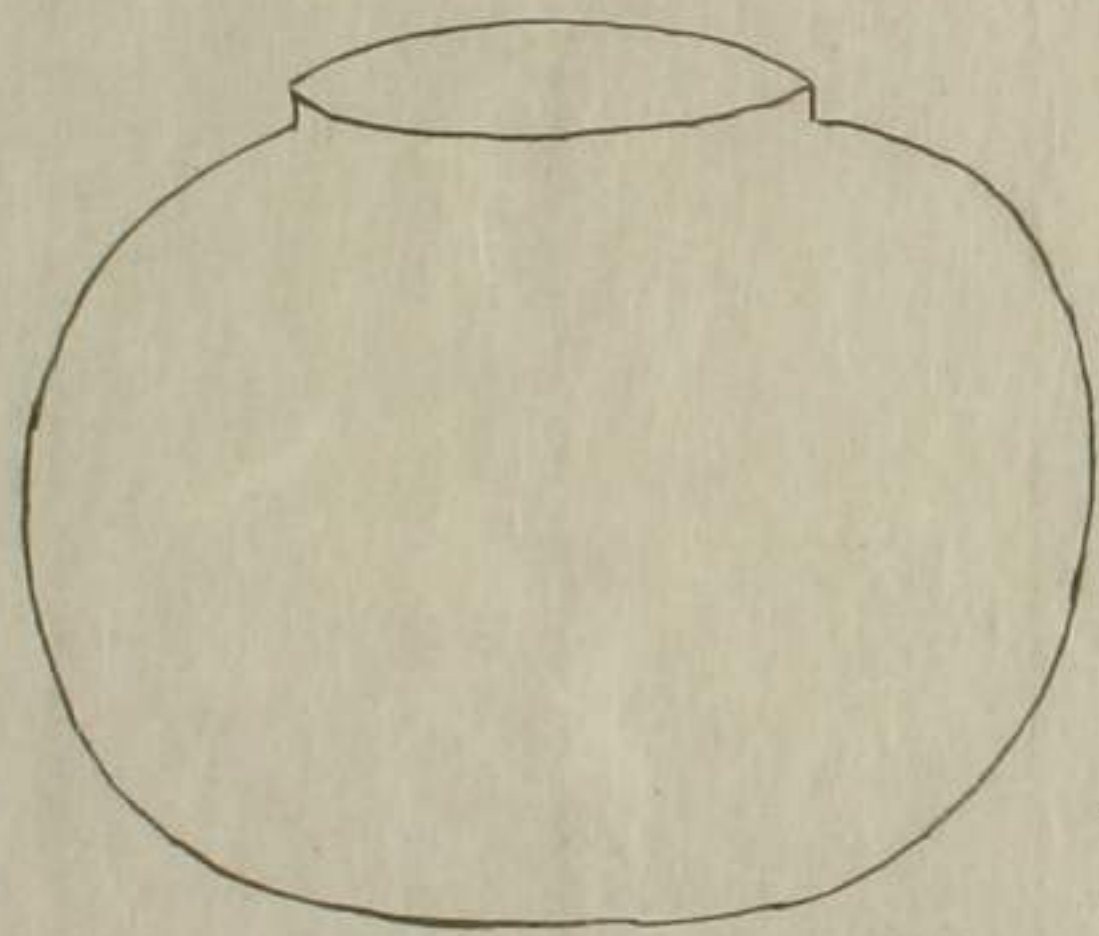
内空

右同所^分出^ル



高^ナ 蓋^ハ 一寸八ト
径 三寸二三ト
大^シ 穴^レ カケアリ
蓋^ハ 径^ハ 三寸五ト
大ヤキ 單色

右同所^分出^ル



高^ナ 蓋^ハ 五寸三ト

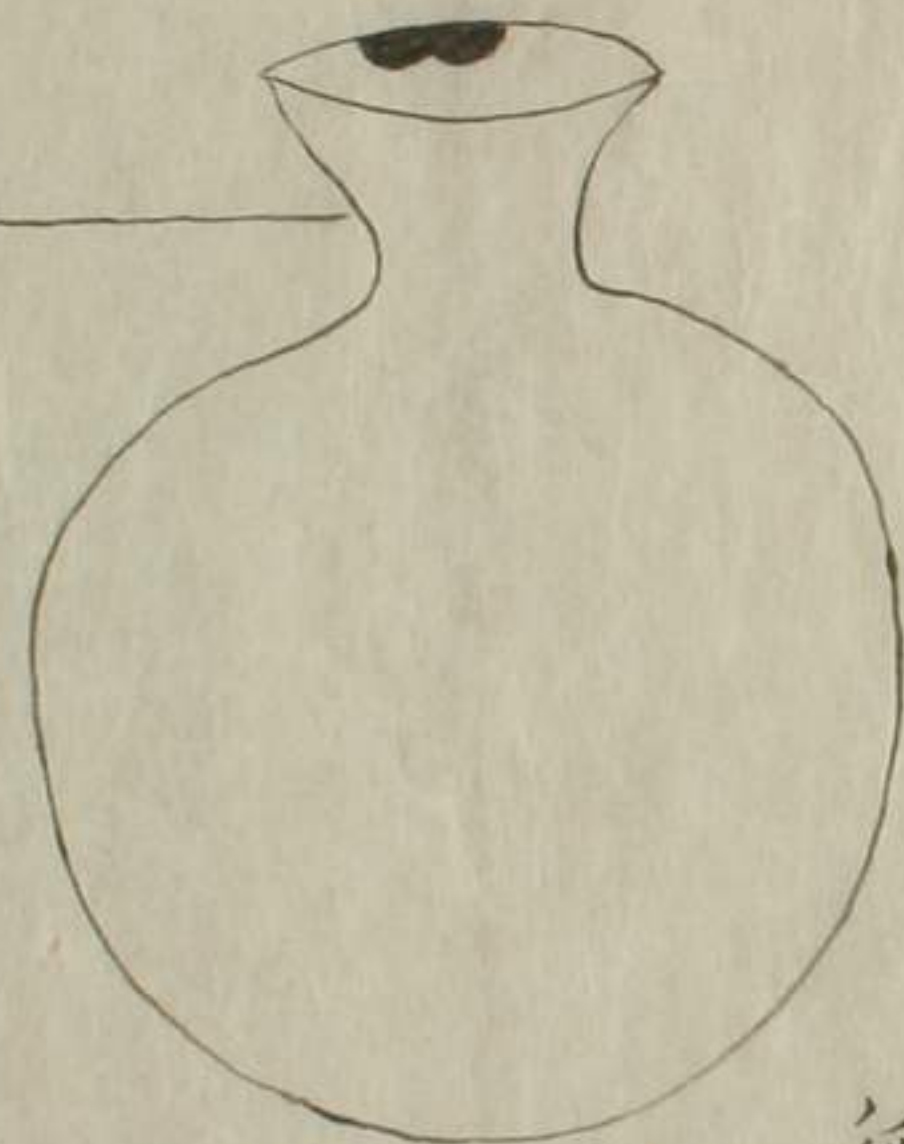
径^ハ 六寸三ト

口徑^ハ 五寸九ト第

一^ニル^ル 底

給^ハ 先

右面之様



是の上の鏡イタルモノカ

高六寸四ト

径五寸九ト

或五ト三ト

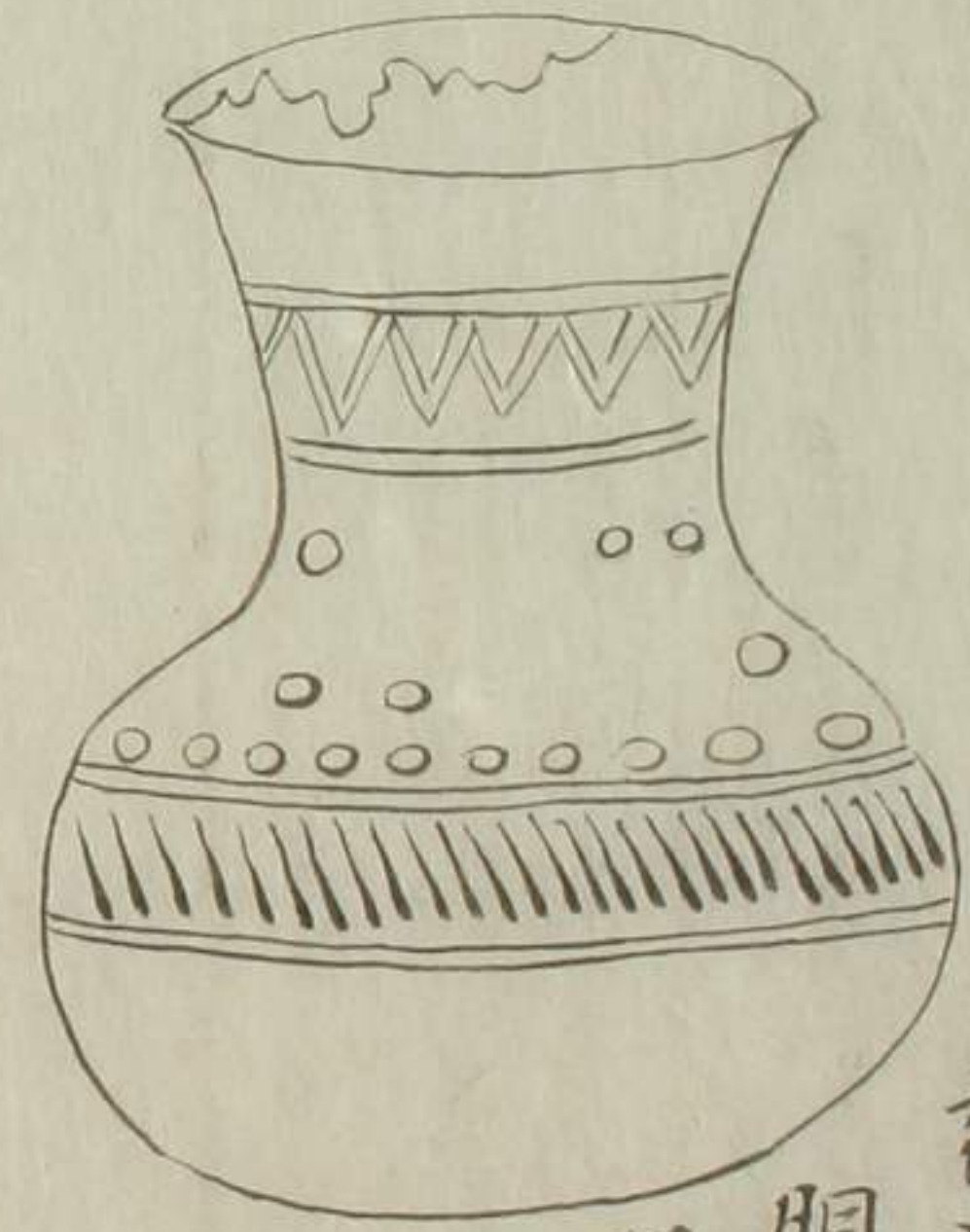
口徑四寸三ト

一ツ丸西瓜ノコトニ

スヤキ黒名

内空

右面之様



高六寸四ト

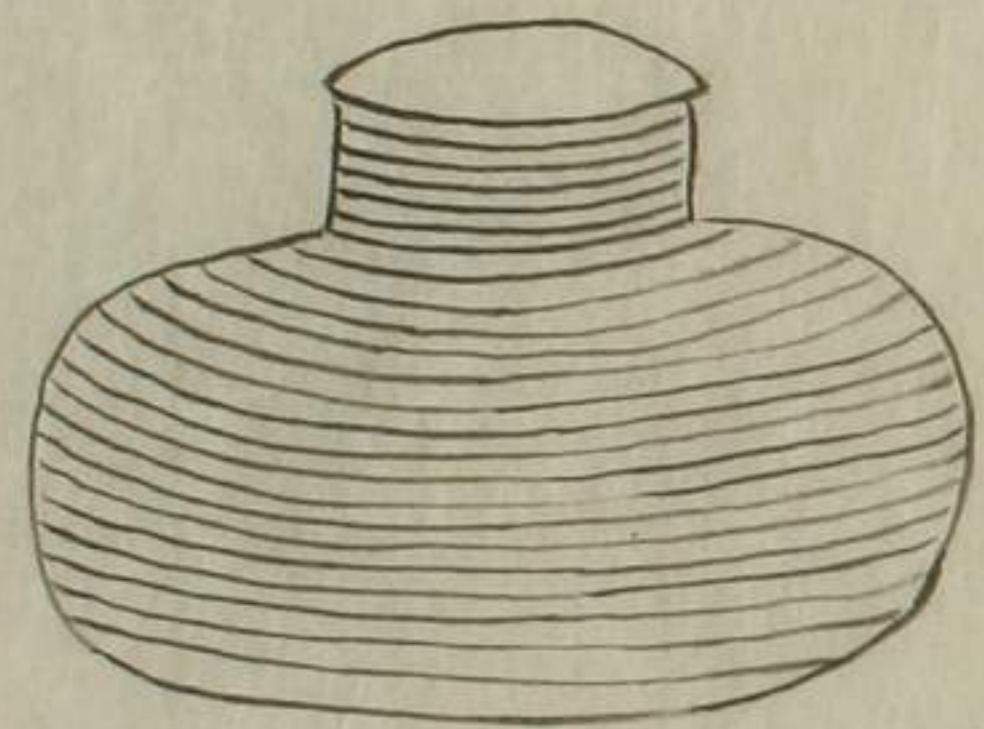
胴径五寸一三ト

口徑五寸二ト

スヤキ單色

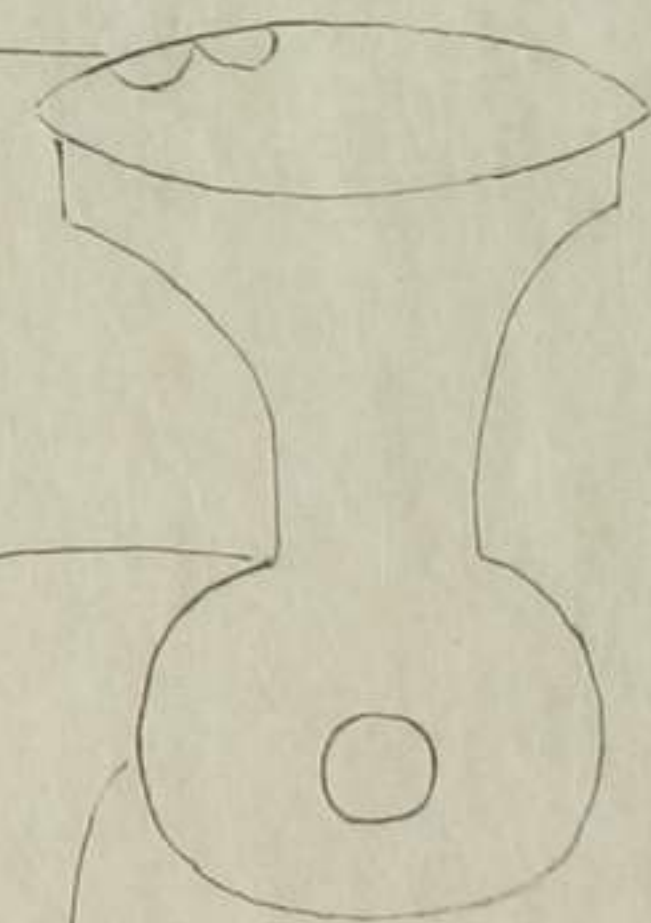
口欠ケ 終ニ漆ニテ補ヒナリ

蓋



高^サ 三寸五下
 口徑 五寸五分
 胴徑 五寸五分
 底徑 四寸五分

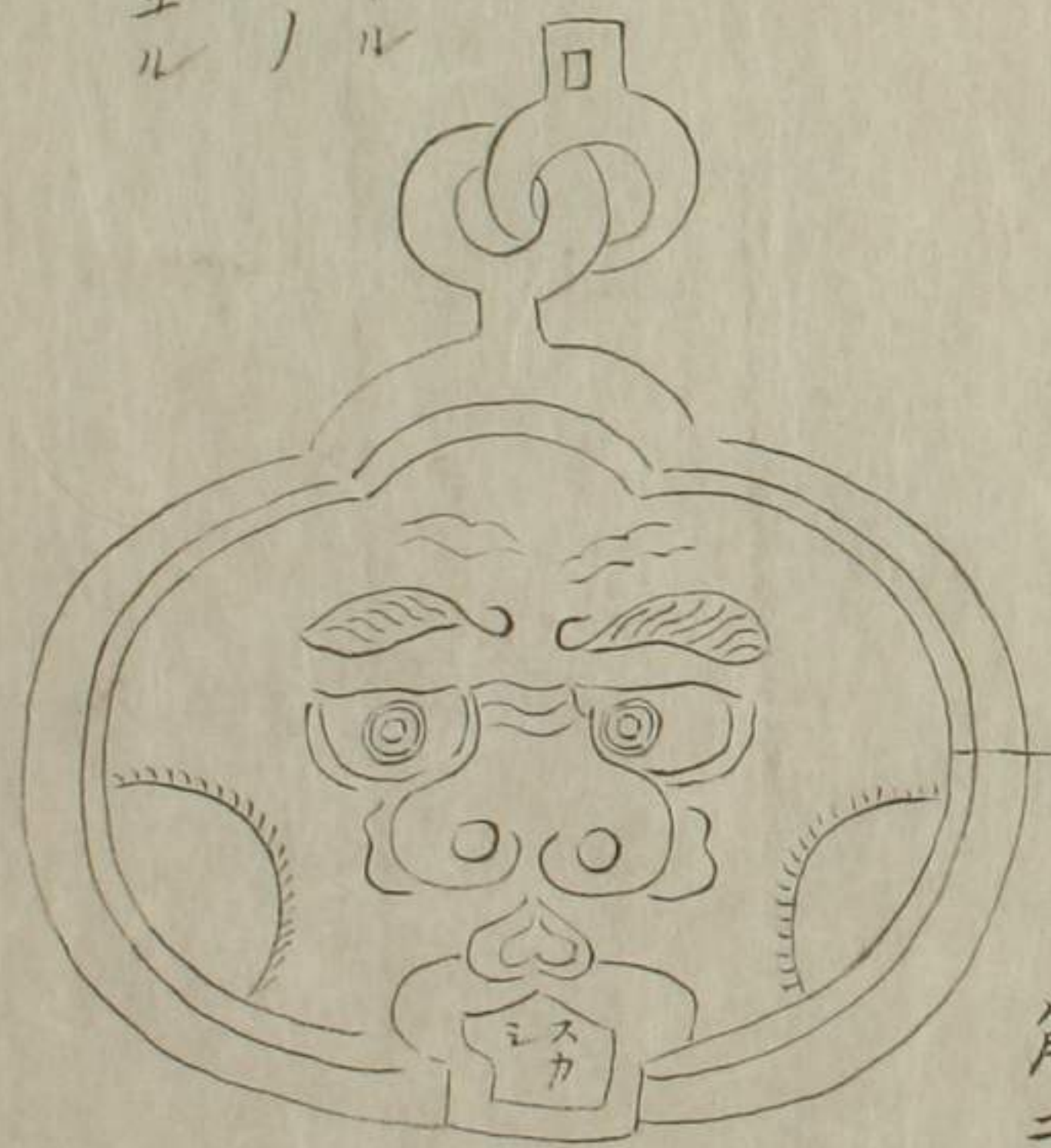
口徑 四寸五分、
 高 三寸五分



口徑 五寸五分
 高 三寸五分

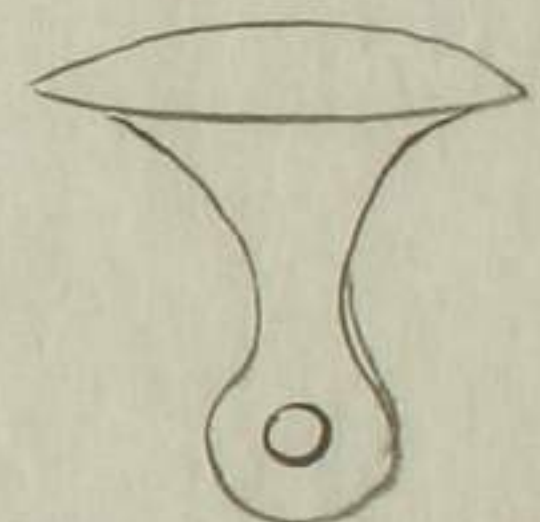
高 三寸五分
 色 薄 灰 大 瓦 キ

片面ニ文字アル
 朽テ不見元ノ
 字カスカニ見エル

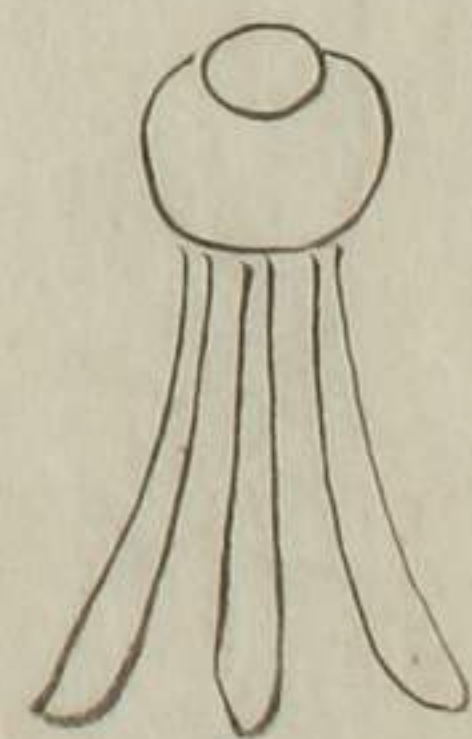


筋ニ段ニ高シ

明和年中和州三輪於山中里人堀出スト云フ
 全躰唐銅如鬼面モノ毛彫大キサ如图



ロケシカラス大ナリ
 下ニ臺宛アリ
 高サ六寸平
 口径六寸余
 上ノ品



上ノ品

三和豆
 足長サ五寸
 高サ八寸
 丸キ西三寸

久安古机之圖

此所裏久安ト
云コト彫テアリ



脚堅木ニ似タリ

脚厚七八分

二寸八寸五分

幅一尺六寸

久安二年

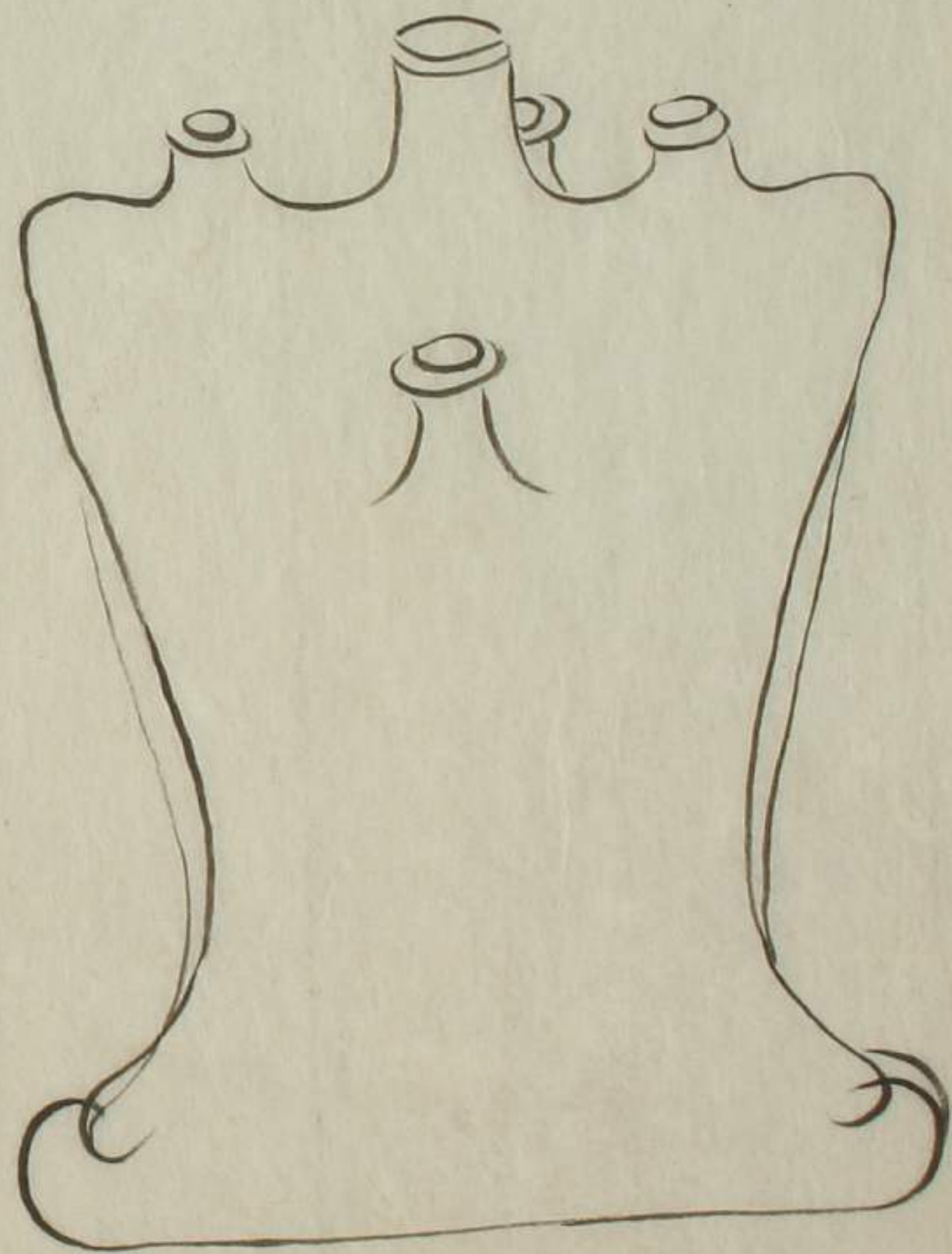
兩

六月十七日造

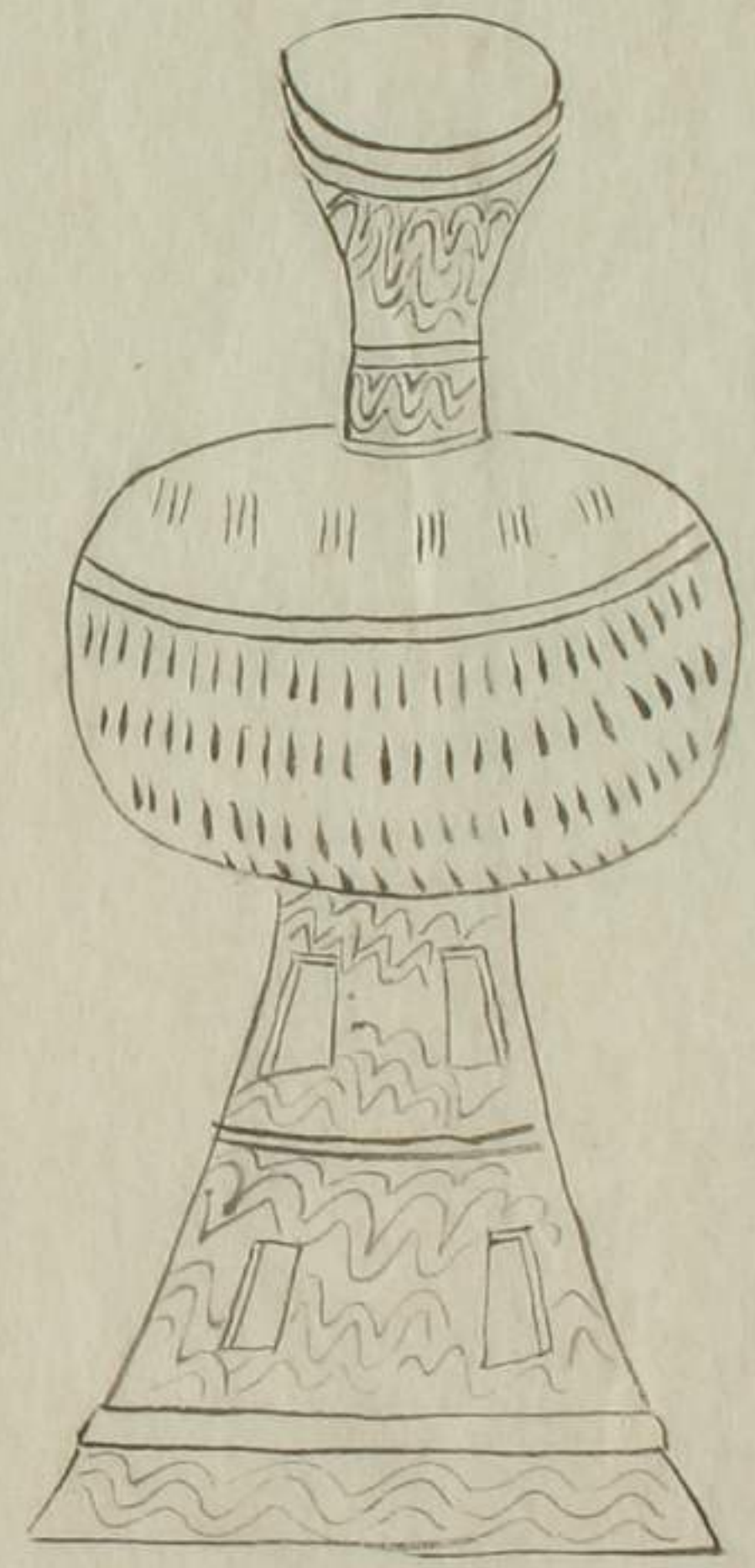
洞津庭田生安花

天明五年五月上旬山田久留所威勝寺西南去二丁許笹尾山中
田間得之和銅百九斗若年百九斗和功百九斗者之
以由也一寸字在也

門口三丁



此類上古、陶器所、堀出、不明器、類ナラン



垂水村金剛寺ヨリ堀出、至テ古雅ナリ堅硬
ニシテ珽文アリ
大塚岡佐藤ス

伊州甲斐村勢州岳為村首ヨリ
奇麗ニ土器土中ヨリ出、形状
高多、有、俗、基、燒、下、云、曲、玉
管石ノ類、入、リ、有、之、曲、玉、考
古、是、流、云、云、云、云、何、類
村、云、曲、玉、管、石、致、品
出、云、卒、井、金、輪、物、也
折、云、路、末、記、録、証、在
云、房、川、氏、江、州、水、堀、出、不
神、代、物、ト、テ、云、云、云、云、何、何、何
何、云、何、何、何、何、何、何



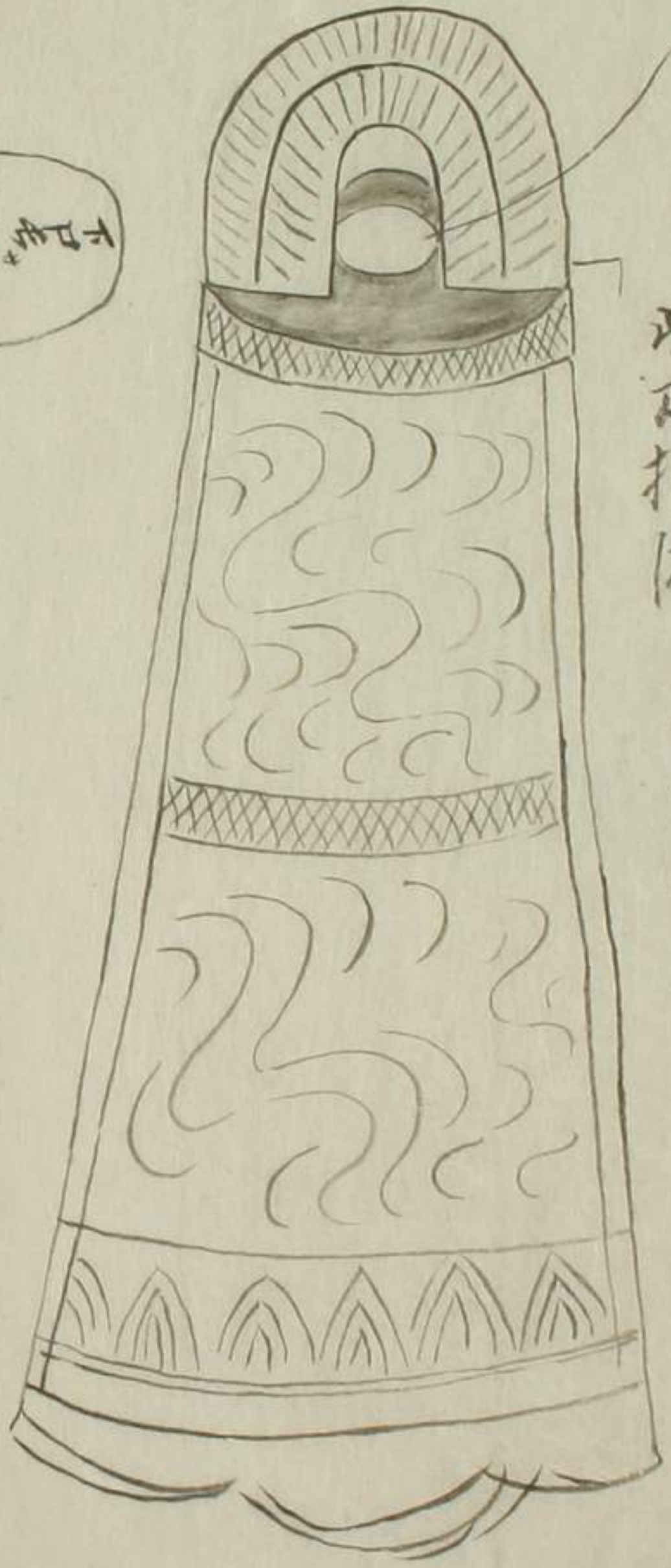
一、志、致、垂、水、村、堀、出、不
層、底、色、面、石、堅、剛

大キサ、圓ノ如ク

元高^サ山尺形如圖上ニ元アリ惣躰銅厚^サ一分余
下口丸^クナク^サニ^ニ身^ラニ^ナリ

元^ノ子^ノ糸
此^ノ指^ノ後^ニ子^ノ位^ニ身^ニアリ

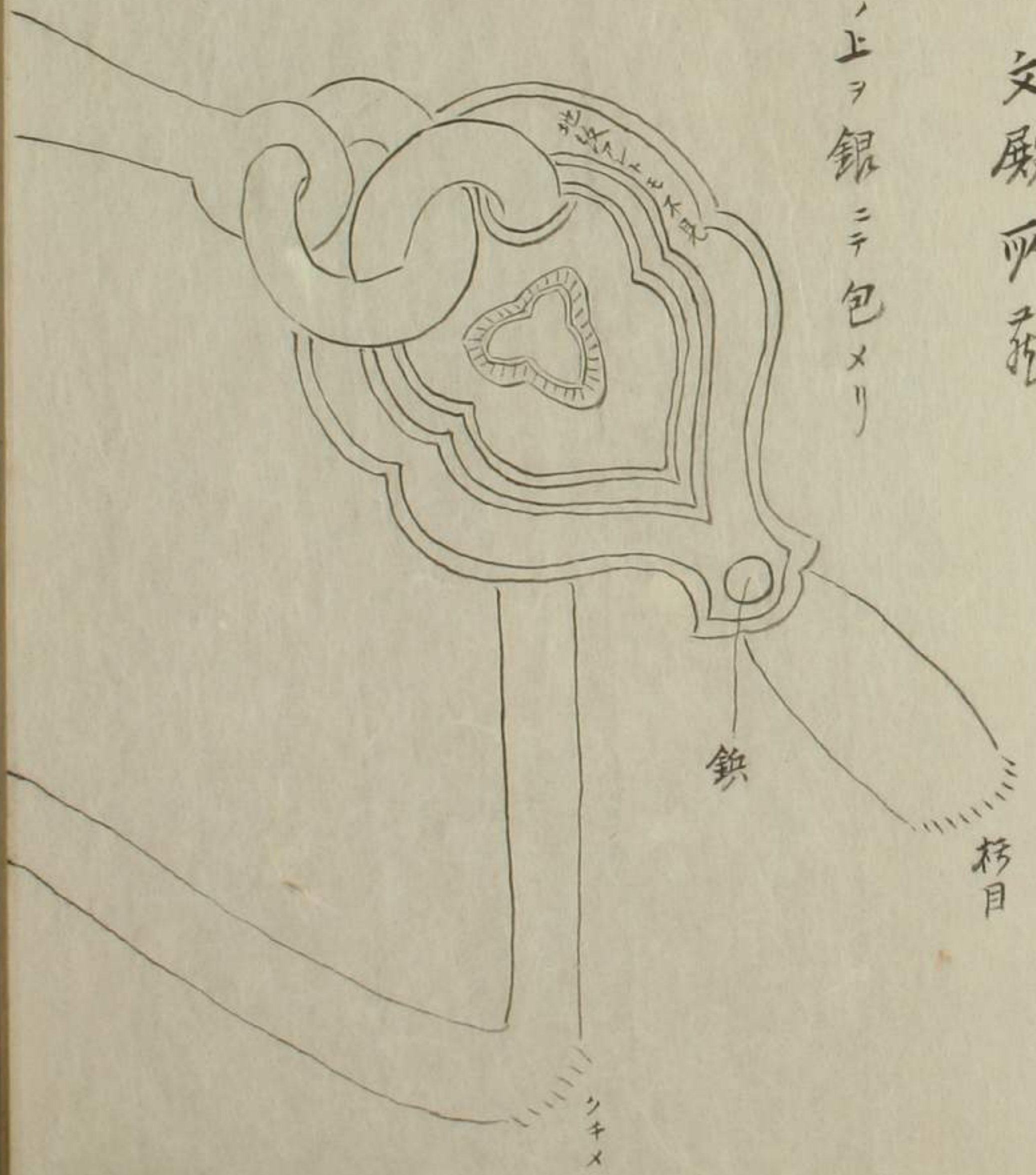
横^ニ子^ノ糸

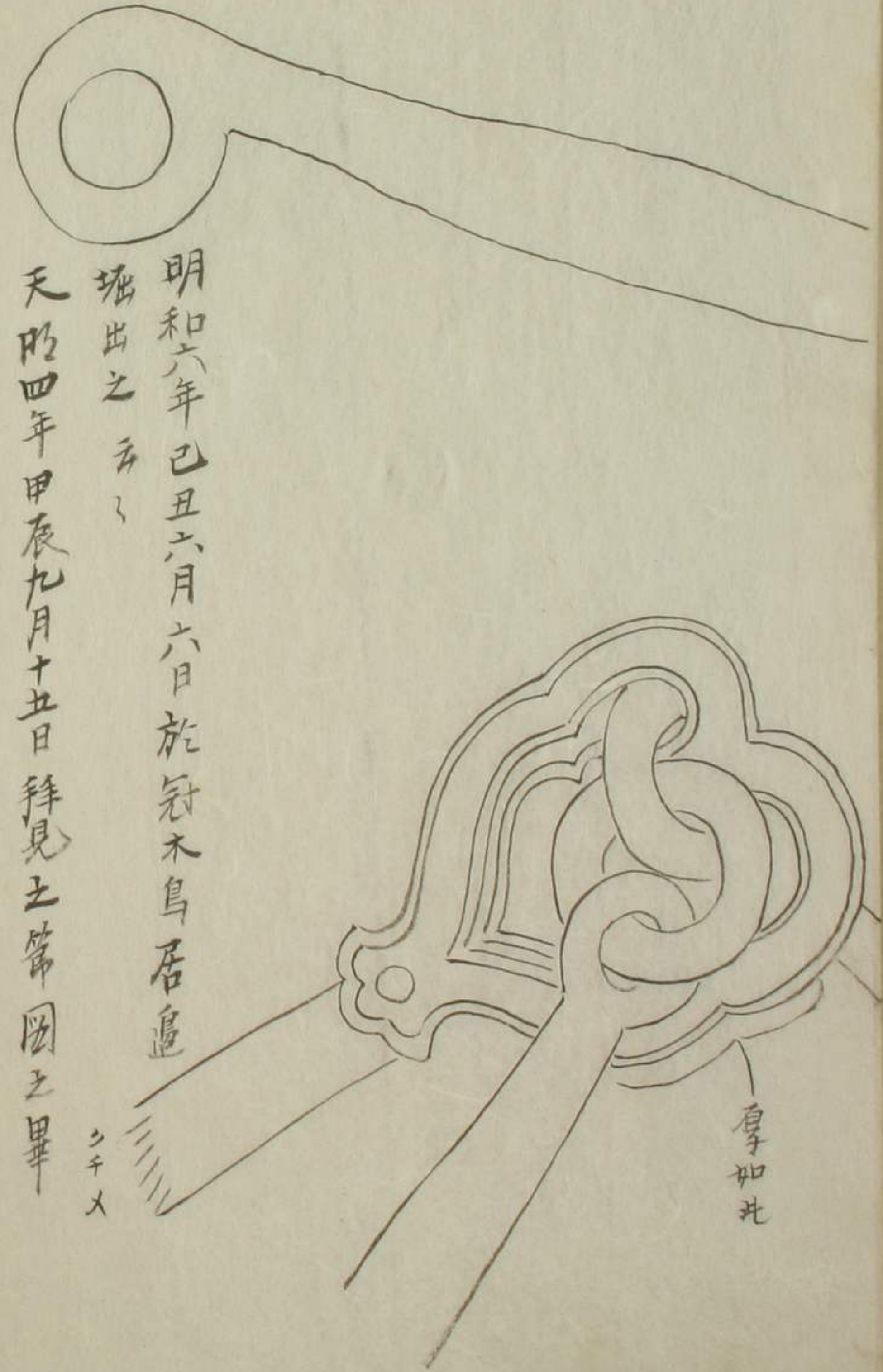


右伊州地中ヨリ出

伊勢内宮 文殿所^ニ在

惣躰鉄ノ上^ニ銀^ニ包^メリ





明和六年己丑六月六日於冠木鳥居邊
掘出之云々

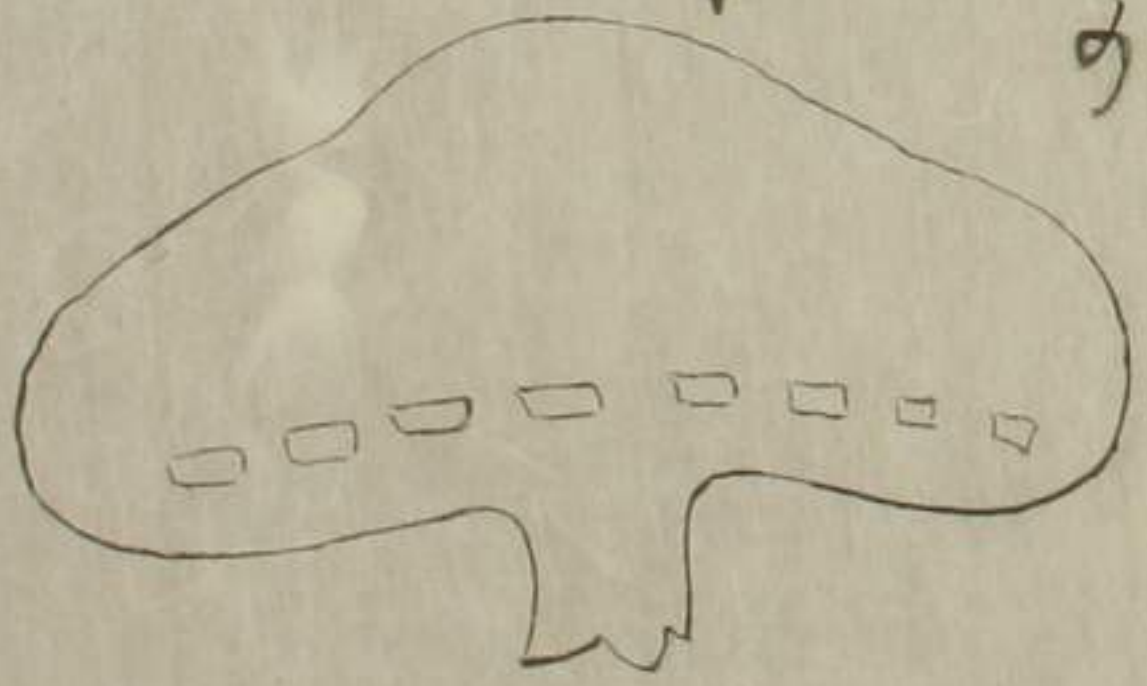
天明四年甲辰九月十五日拜見之常國之畢

村井敬義

厚如此

シキメ

小森上野村奥山に里土蒸一ツ投し
朽と記を添中を始末少く不明に
いふ子に答物に古雅に由來し人あり
地一朽に凡し土中より土器に
滑山出せし金一物あり存形如左
而此等此地を以て土殿蘇を考
上而之考并奥山より見し中
石劍類ノ岡

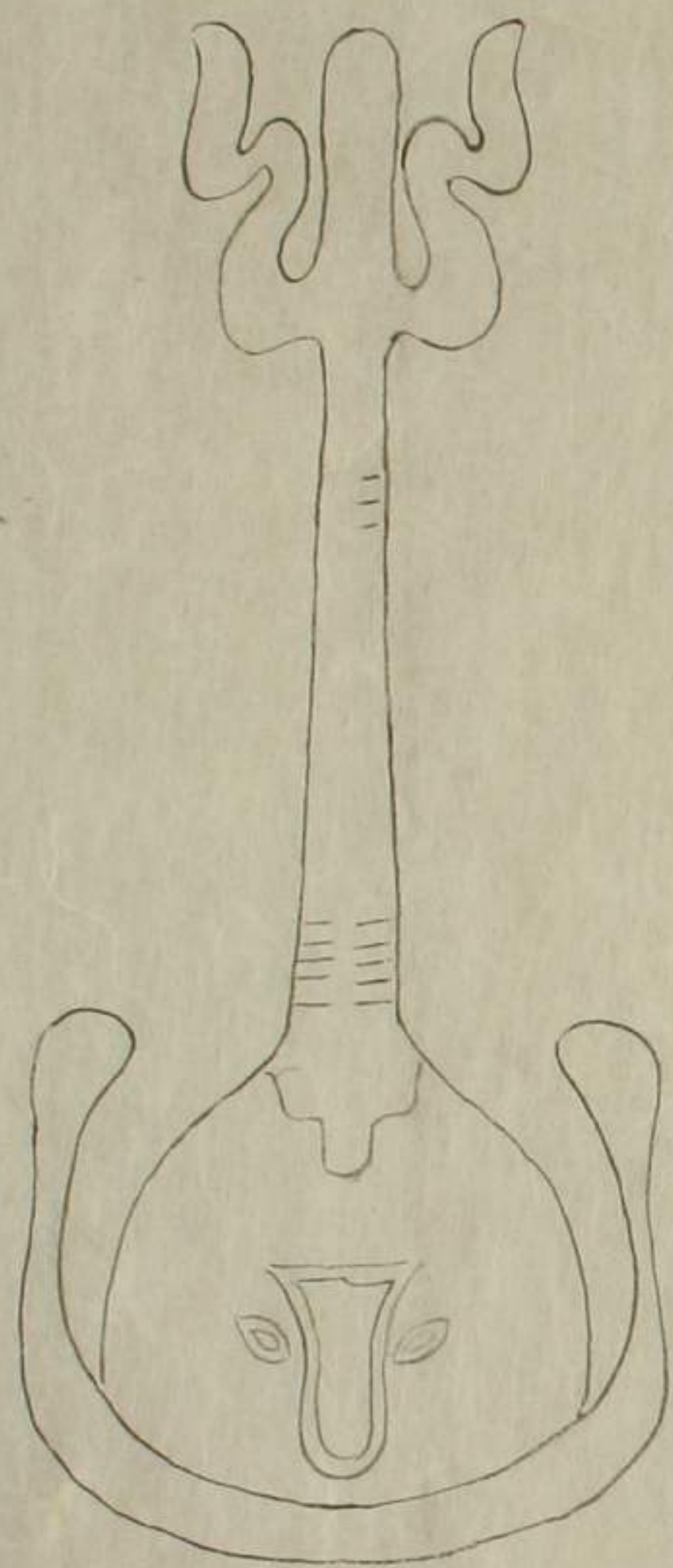


谷川正盛の劍類考
中より出し

小森上野村
 出玉器の
 何れも
 古くは
 古くは



驛路鉄在蘇嶋山等寺

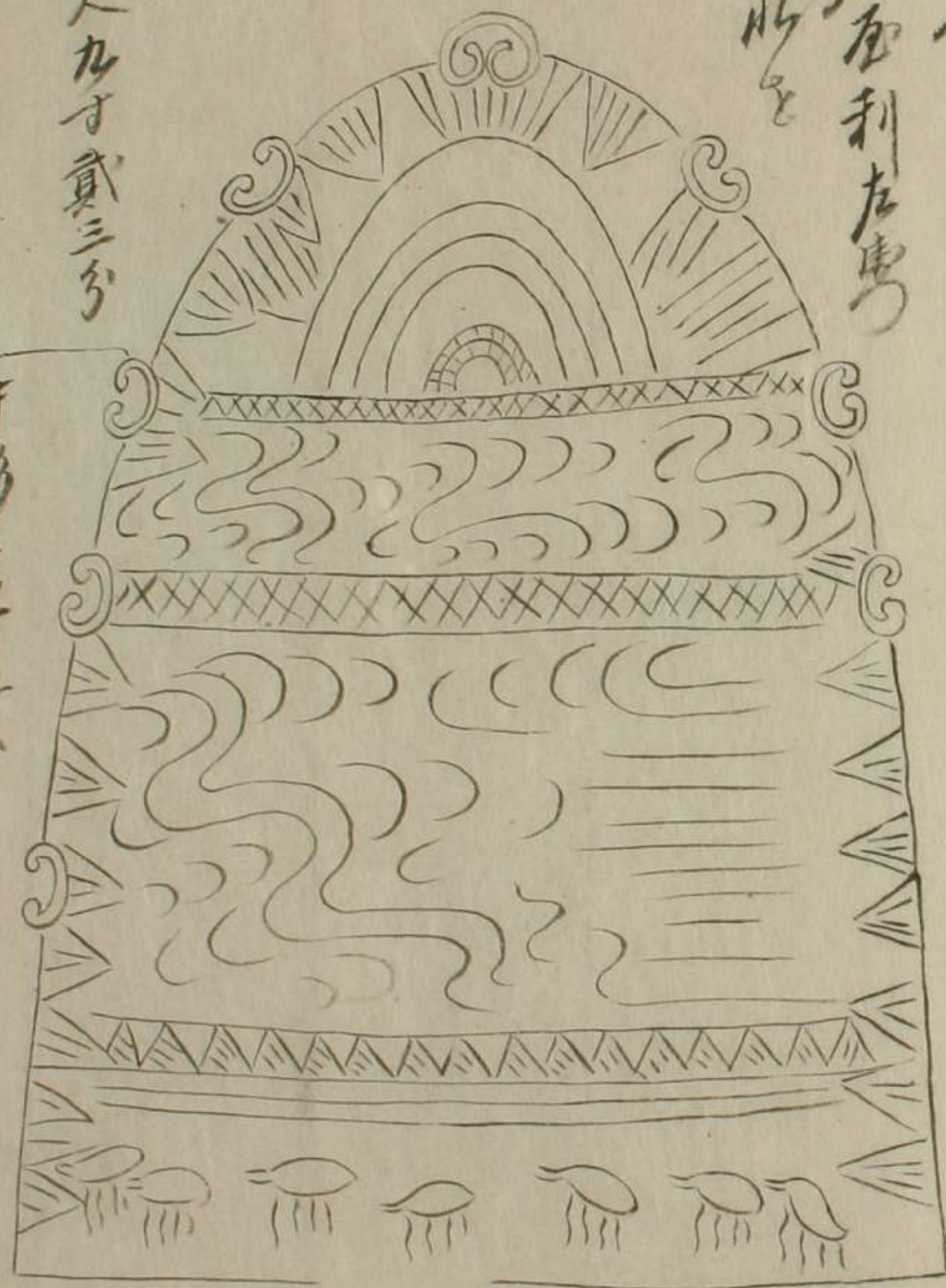


長九寸余

中間両方三寸余

和州長原在善女漆持齋
 東所花利在東
 才二水
 見百
 右

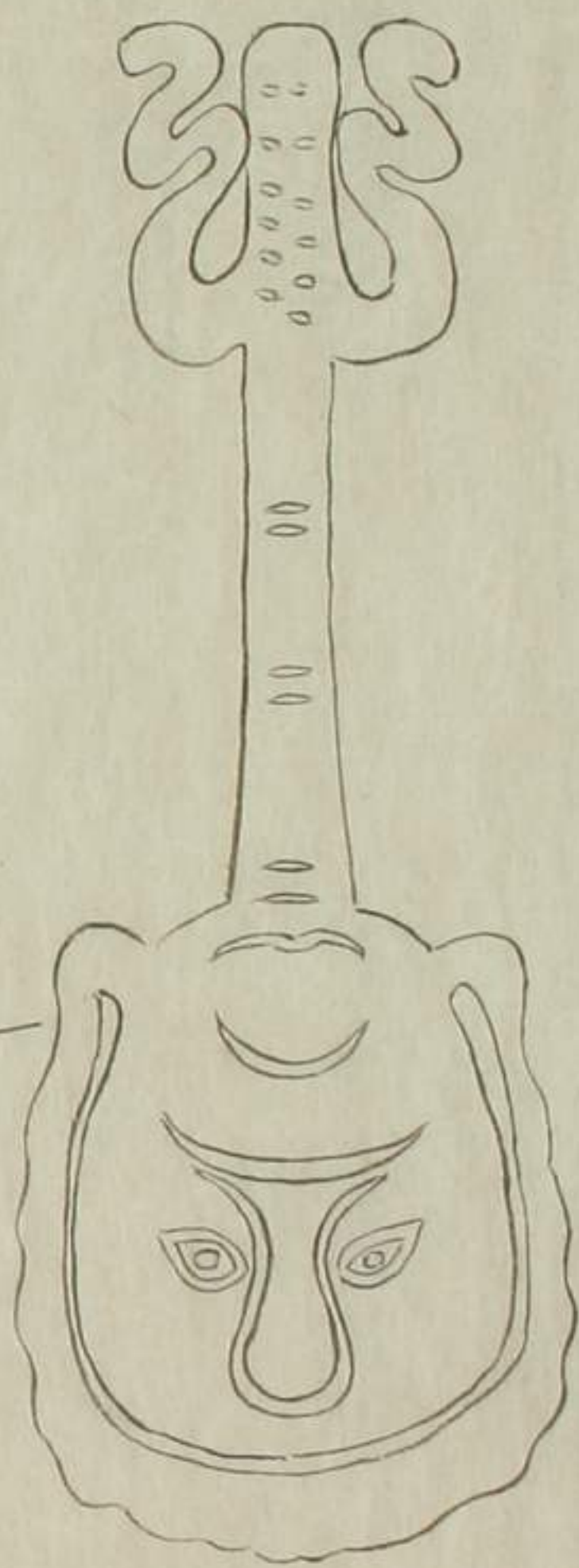
高十長尺九寸五分



中形寸五分
 外形寸五分

每五寸百
 の長
 寸五分

此驛路銘圖子在備前國丸山曾源寺



兩方中間三寸二分

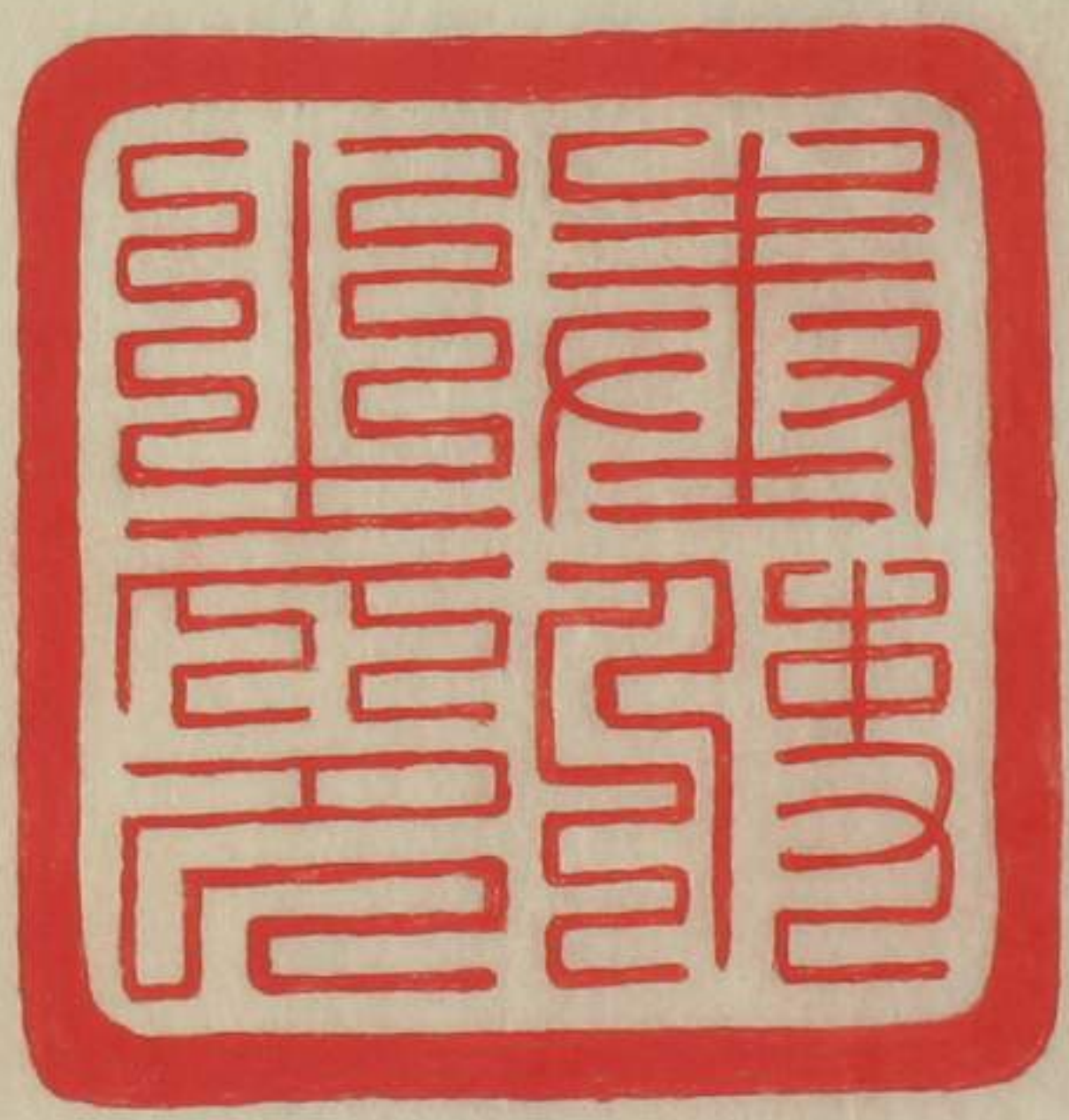
長九寸五分

檢壇女歌自作



川口三郎といふ人江蘇の人なり先年山田亭
 流多し止居といふ店中住ふ所の岡とも書集
 五十餘川日記といふ書物讀書し始ふに戸北押
 淵村ありといふ所ありた嘉子一處止居る嘉子の
 りまゝの右留所用書所より嘉子を尋ふに片者
 所用の書此の嘉子といふ所ありと存やうなり
 といふといふと書きたる一書あり同書云世
 俗に夫の嘉子といふ有妻と伴博考の墓所
 ありありと古書に照ありとありお中嘉子といふ
 同一さすといふ書教おのきと一安ありありと

浪速葦葭堂春未紀州之宮未里中一坊阿朝縣園
乃印切會聖中子子



法苑珠林曰隋大業初倭國官人會居來此學問內外博
知至唐貞觀五年其本國道俗七人方還倭國未去之時
京丹大經每向彼國佛法之事彼國佛法晚至未知已前
有阿育王塔不會在着曰彼父字不說無可羨揚發驗其
矣迹則有所歸故彼土人因發土地往得古塔靈盤佛
諸議相教放神光種之奇瑞許此喜應故知先有也
續日本紀和銅六年大和國守田郡波坂鄉人得銅鐸于
長岡野地而獻之高三尺口徑一尺其制異常音似律呂
勅所司藏之
日本略紀曰弘仁十二年五月播磨國有人掘地獲一銅
鐸高三尺八寸口徑一尺二寸道人云阿育王塔鐸
三代實錄曰貞觀二年參河國獻銅鐸高三尺四寸徑一

尺四寸於渥美郡村山中獲或曰阿育王之寶鐸也
扶桑略記曰天智七年於近江國志賀郡建崇福寺堀出
青異寶鐸一口高五尺五寸

拾芥鈔記本朝五奇異曰近江蒲生石塔昔阿育王使諸鬼
神造八百四十塔此其一也每年大峰羣集行道此塔

近年安濃郡阿野村ノ山中ヨリ宝鐸一口堀出ス谷
川淡齋コレヲ得テ後 高田專修寺ニ奉ル古書ニ

出ルテ證據トシテ阿育王ノ寶鐸ナランナラ記ト
云此宝鐸高二尺徑一尺三寸必阿育王ノ寶鐸ナル

ベシ

土師位

家祖土師翁是眞居位の所を傳へて南伊勢と物名

也 鐘蹟は九山と号し家此子の民乃居

位也 所を土師位と云て片名ありて土器在り

埋り此里農子堀得て黒土の所と号し

と名方と號せり云々 天西の法と名方刑部

屋居跡の城山と稱し會時迄の村里といはる

燒方の里稗田の村名形多氣郡郡土師の土師位

先祖に此の翁領司せりと云ふは津村洞津の土師

田の西田あり云津島機師田是ありと云ふ

日本書記第十四云

夫亦

折るる人の煙を吹くとも、藤塔やまに北里の松風

登高志摩

塔の塔

神代卷の纂疏云、塔土弱ハ神也、塔作白比神海を
煮くこ此作きり中神ハ
伊勢塔乃子何也

中華塔乃起也

世本云、高沙氏海島所煮七塔と云、宋哀ウ云、高沙
塔ハ有比雲云の臣何皇孫の國海ハ在比也、彼比
人魚塔乃利也、古に或云、高沙氏ハ炎帝比時

高諸侯也、唐韻云、以日く、高沙也、め七海也

莫く塔と作也

天明八次申秋八月

替陽一志君小森上野村
建管古時部高弟孫

奥山掃神夜知者

持書

○本居先生著述書目

上木の部

未刻の部

古事記傳

全部八巻
四十余冊

右の内二巻合七十一冊、板本出来
あり、及び追上板り、抄本也

出雲國造神壽後釋

一冊、進上板り

是ハ神皇の祖の伝説あり

神代正語

三冊

是ハ古事記の上巻と日本記の神代巻と合せて
右巻の訓を以てくぬる書ありしる書あり

新古今集美話家つと

五冊

進と極行

同

とらりそん

三冊

同

是ハ新古今集の後編ありしる書ありしる書あり
の集り入るる書ありしる書ありしる書あり

玉子百首

一冊

是ハ古の道のまを古風より新なるまをみだり
新のまあり

大板詞後釋

未成

是ハいそゆの中臣後らのまあり

五くしを

一冊

是ハ左の大言が物語をまきしる書あり

歴朝詔詞解

未成

是ハ續日本記の皇座の語あり

國號考

一冊

これハ國考の記をふりて考へる書あり

馭戎慨言

二冊

是ハ上古より近代まで異國と通信のまを論じ

真曆考

一冊

是ハいすの異國の曆考の考へる書ありしる書あり
の年月日のさしめを考へて記したる書あり

葛花

二冊

是ハ或儒者の直日の靈を破したる書ありしる書あり
を考へていかりに考へてしる書あり

字音假字つひ

一冊

是ハ字音假字考の考へる書ありしる書あり
の考へる書あり

斜狂人

一冊

是ハ斜狂人の考へる書あり

見、衝口答といふ書の非を辨したる書あり

漢書三音考

一冊

見、漢書漢音并音考の字を補したる書、附録あり

萬葉集玉の由考

未成

見、万葉の中の中考（あり）

天祖都城辨

一冊

見、或人の天祖都城辨とて照太神の都を大和の國ありといひの非を辨したる書あり

新編此玉の緒

七冊

見、七冊をいひの書とてわろくわろく（いひ書あり）

源氏物語玉の小櫛

未成

見、源氏物語くさりの語あり物語の古き并新書を新編し

玉のり

折本一冊

見、七冊をいひの書とてわろくわろくしたる書あり

古今集遠鏡

見、古今集の身とことく古今の物語を叙したる書あり

玉のり

一冊

見、古今集の身とことく古今の物語を叙したる書あり

菅原の日記

一冊

見、菅原の日記の身とことく菅原の日記を叙したる書あり

草菴集玉筆

見、草菴集の語あり、諺解并雑語の非を辨したる書あり

玉のり

巻数不限

見、玉のり玉のりといふ書あり

鏡屋文集

因前

同歌集

同前

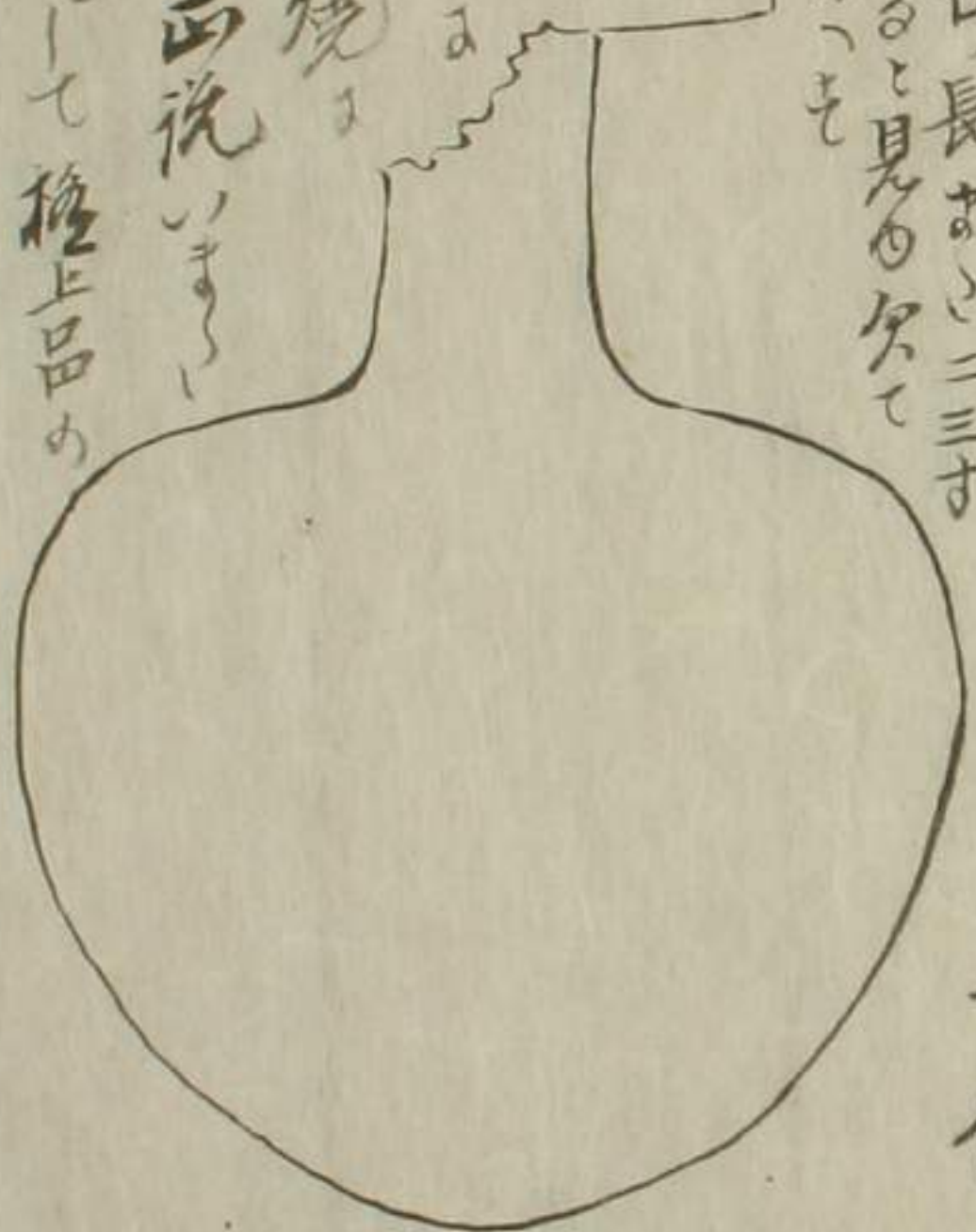
書林

伊勢松坂

柏屋無助識

右諸國磐州津原藩士市川俊秀存人某^{國津}矢人
竹田孫助より贈白紙切しころつしまゝく賞取
七印表

或説は坐達上人の
焼くものといふ也
坐達焼といふは中焼
異なりは何處なるや西説
不詳なる法古の物にして極上品の
焼とらん



此口長さ二三寸
はると見ゆ欠て
又も

高十八九寸径五寸程

此所笑うとも動る
居付とくをう
石はハ軽色の色
程をききと見ゆ
の毛一本自由
中蒸き中蒸
ハ口ハい
ハ口ハい
あとい
動るも

大ヤキ唐瓶色

東奥仙臺嶺山目村金賣吉次屋敷といふ所
今も煙かきつる
その煙場が同村所
山目早といふ所
商人高老といふ所の
秘蔵

拓殖卿長解

神田稔疑

申奉北賣買聖田立券事

限東能寺田 限西石新大万石田

限南京、放湖長穂万石田

限北物新廣万石田

拓殖卿長放后安万石之賣聖田旨

付價錢捌貫

天保勝寶元年歲次辛卯多此常地作料
一丁年負米四斛

右、聖田買得、安久興寺、三輪象

以前聖田賣買人依法式立券者、此後仍
具錄狀申送以解

天保勝寶元年五月廿一日保長批尾后井麻呂

田主 放后安万石

証人

王寺少掾 同姓

石知石村

兵代万石

筆取

王生少穂足 キヨタリ

航長石部果安麻呂 セイテウ イソベノハタ ヤス

天保緒漸先の某田 キタ、義倉中の松植江若解 ゲ
申 ウラ 常 ジョウ 地 チ の由 ユ 申 ウラ 由 ユ と讀 ヨミ 由 ユ の文 モン 義 ギ 又 マタ 後 ノチ 申 ウラ
ヤシ 考 カウ 地 チ の由 ユ 申 ウラ 由 ユ と讀 ヨミ 由 ユ の文 モン 義 ギ 又 マタ 後 ノチ 申 ウラ
考 カウ のり ノリ と ト 申 ウラ 地 チ 考

津 鈴木九郎兵衛 シヅメ

本居考

王生少穂 同姓

白 シロ 符 フ の ノ 一 イチ

所代万 ソダマン 王生 オウセイ 天保緒 テンポジュ 三年 サンネン 申 ウラ 由 ユ と讀 ヨミ 由 ユ の文 モン 義 ギ 又 マタ 後 ノチ 申 ウラ

天保緒 テンポジュ 三年 サンネン 申 ウラ 由 ユ と讀 ヨミ 由 ユ の文 モン 義 ギ 又 マタ 後 ノチ 申 ウラ

某田 ミナタ 考 カウ

王生 オウセイ 所代 ソダ 印代 インダイ ナルベシ

天平緒 テンペジュ 元年 ゴトシ 正月 トウグヅ 五日 イツニチ 松 マツ 植 ウヅメ 編 ヒ 撰 セン 叙 キョ 臣 シ 井 イ 廣 ヒロ 聖 ホウ 田 テン 賣 ウツ
券 ケン 云 クニ 神 カミ 田 タ 七 シチ 匠 テウ

同三年四月十二日松殖卿尸主車持牛床呂賣差云
合田肆陸百八十步國司池田朝臣足床与判
天平字二步十月廿八日國司六人邦連帖婆麻呂之券云
合地壹拾町 岡田四陸
畠九町六陸

限 東界朝宮谷 南界驛道
西南角藤原夫人地 北界山嶺

右在阿部郡松殖卿此寺為東大寺家通合買得也記
者寺家勅狀云件東界朝宮谷并野東塚賀茂谷東深
三谷也南界驛道者并野南塚伊勢路也
松殖川合兩端山内出作目錄田章

合

松殖卿山内出作四十八町五陸百步
川合端山内出作廿町五段六十步
勅判

方今檢寺家公驗本證據皆以明鏡也寺領者專謂
顯為也

伊勢川園

寬政の元一見云此九月河辺村を神の代意いと云
く此之より右と云ふは右相河原此處外のぬいけり
いふよりいふ河原を右見侍りの管右と實堅剛
差色を帯て一光通しきりけり小管右と云ふ

奇形のさまじく石一品出たり石理石麻に似て
 輾じしま時免の多也其形奇なり其石
 在りて千井孔を穿る如しと云うりて管石教顯
 句云一而所出りて取ますと和州三輪山とて白石と
 して石物を扱十箇場所と云ひ一箇を如しと云
 しく竊實を歎角の如し片如しと云
 奇形の石河州と云ふおろし形とていと奇なり是て
 管石句云其石河州と云ふおろし形とていと奇なり是て
 河州村のいしを如しと云ふ見しと云ふ山頂の古
 陵のさむしなる所なりと云ふ此石の如しありと云ふ
 炭坑の古き物おろしと云ふと見しと云ふ山伏塚と
 云ふあり或人古き如し一面朱の一塊と云ふ

と云

奇形石

此圖

如し

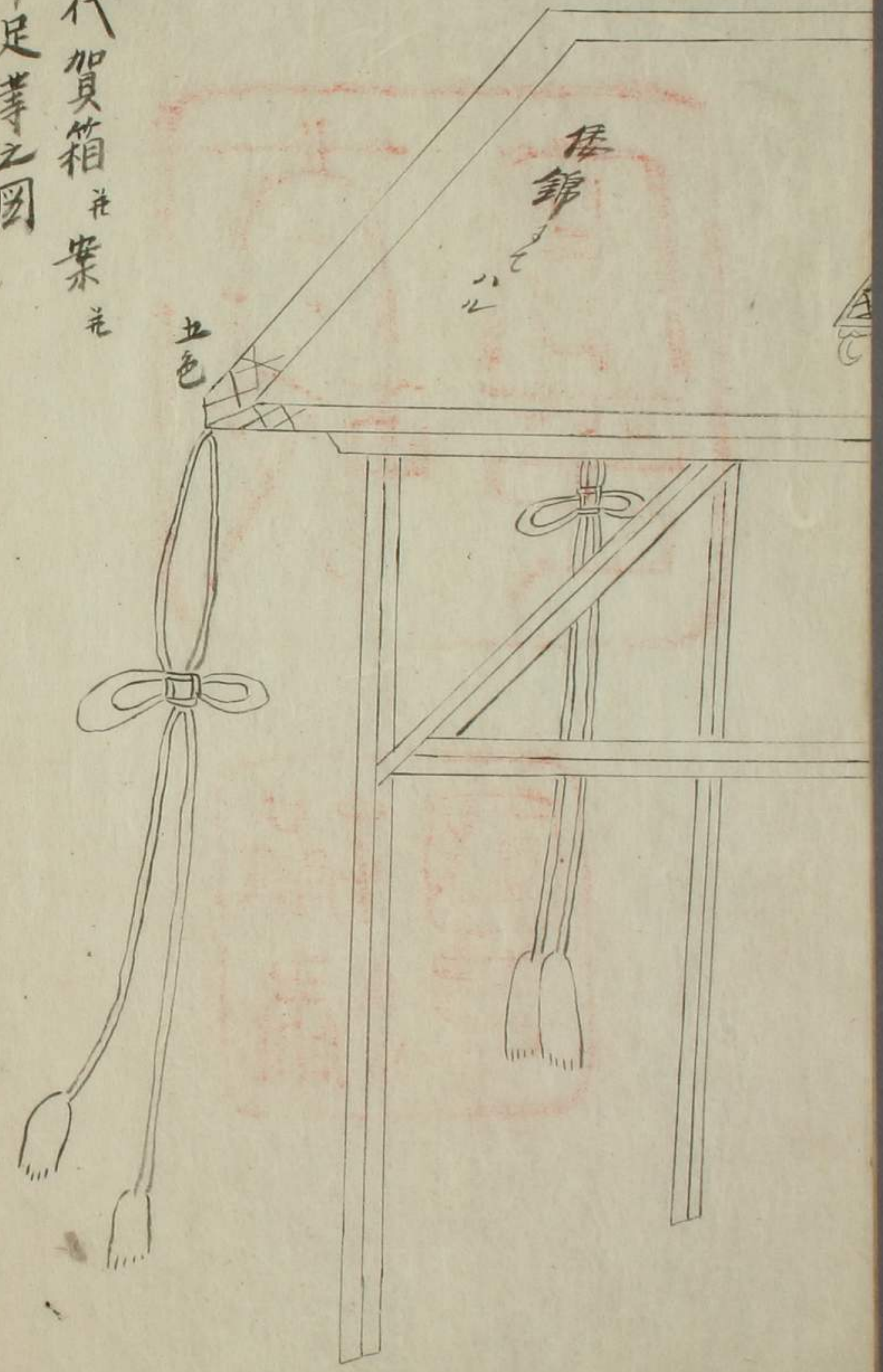


管石大ナキ如圖
 玉管ト云ヘキヤ石
 理美細石質堅
 一穴通ス

白石ト云ルモノ
如圖

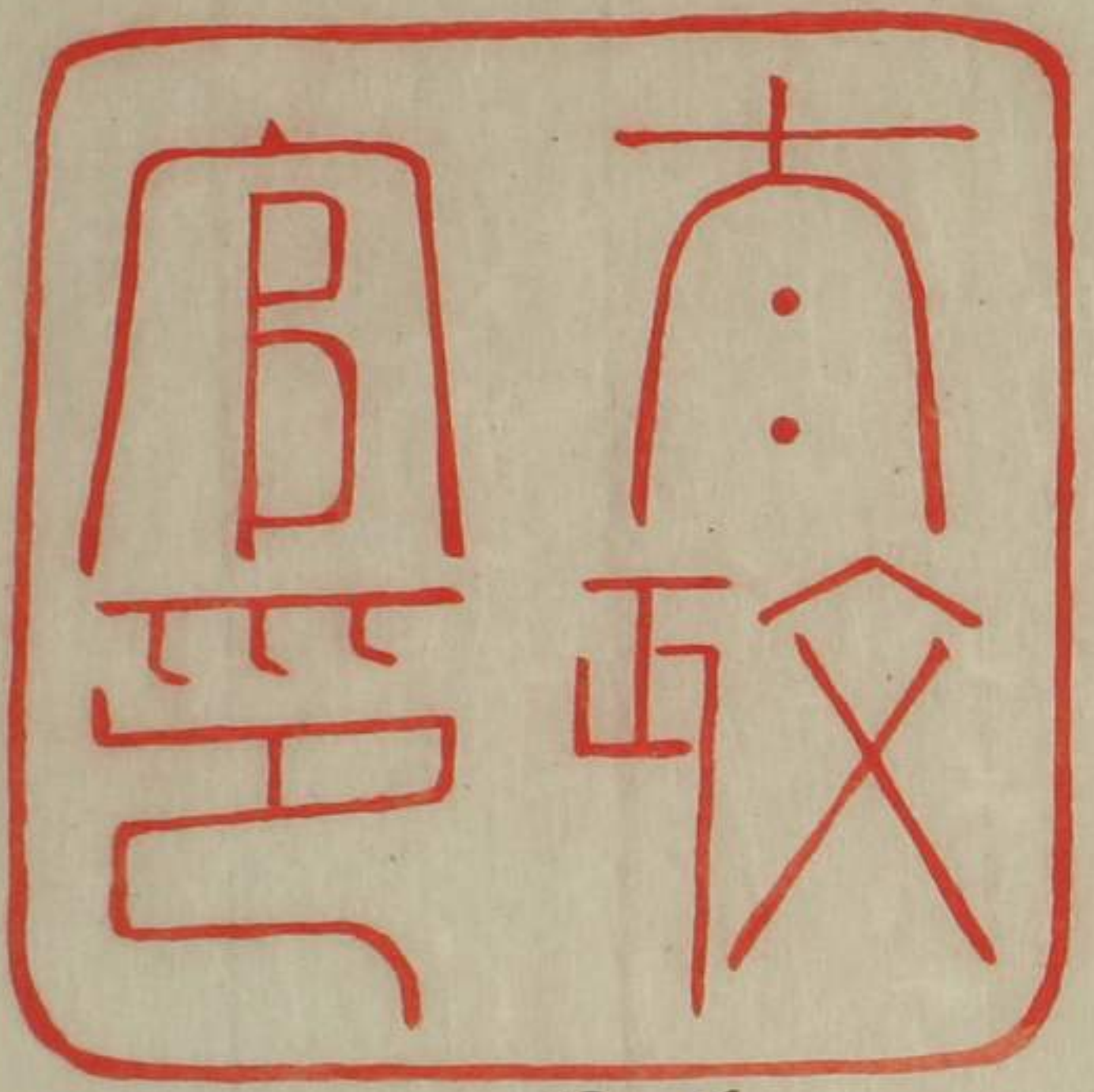


近代賀箱 并案
 華足等之圖



東大寺所藏古文書中得其一二而載于此 天皇之印樣
 廿方公式令或貞觀格或弘仁格等可考

大政官印



攝津國印



天平勝宝八歲十二月廿六日
 從三位行大夫文屋真人智努

伊賀國印



同



天平感宝元年
從六位上行伊賀守池田朝臣足床
天平宝字二年
正六位上行伊賀守六人部連佐藤麻呂

延長元年

伊賀大介藤原朝臣志

本長款

阿拜郡印



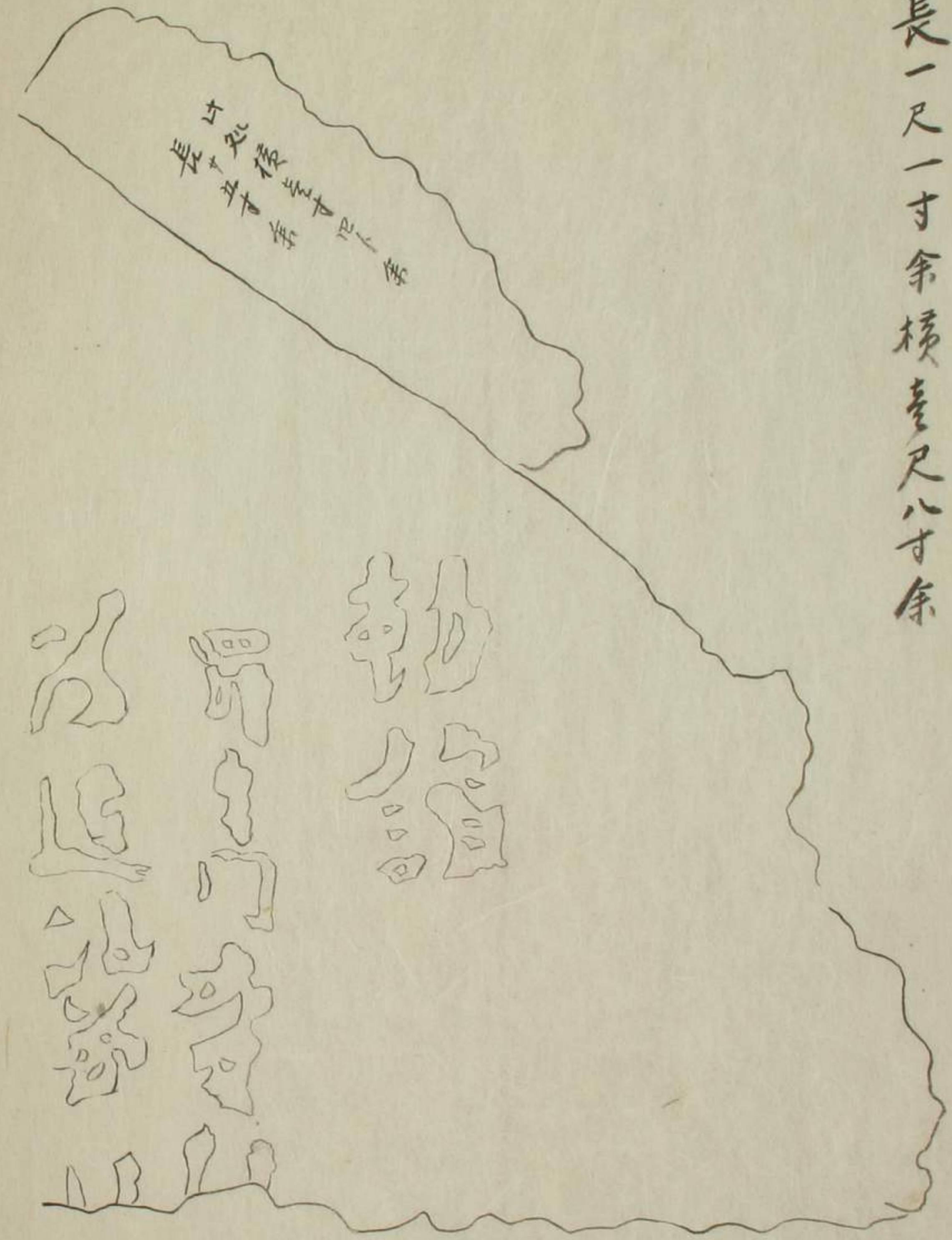
天平感宝元年
天平勝宝元年

柘植郷印



天平勝宝元年
柘植郷長
桃尾臣井麻呂

長一尺一寸余 橫一尺八寸余

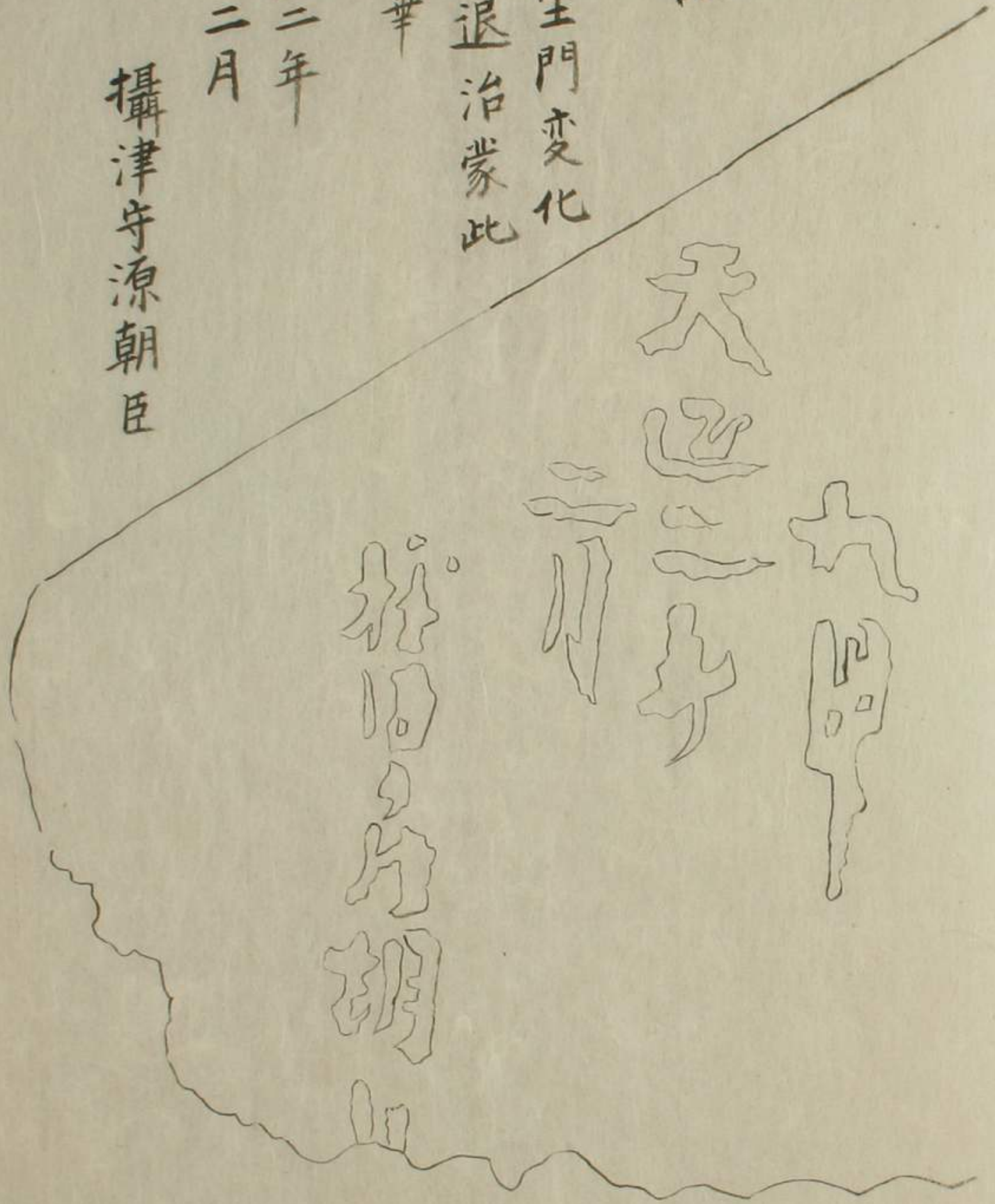


勅誼

羅生門变化
為退治蒙此
札畢

天延二年
二月

攝津守源朝臣



時を寛政十二の望し大平の書三月廿一日の何
り

和蘭人曰古登といふ人「タブラアトニカ」といふ書
の増説中又頭顱の説の下に軟骨を古きより然録せる
活説の書又國の名を忘るるを或曰僻遠の地の鄙
人著其書れ出さる小児の活説中と似る東縛し經
の形を長長ありしと云れ然れ以て喜地とて美相と
云すといふ云れ小児の胎蓋ハ脆軟にして自由なる
と云ありといふ説よりして日古登を引説せしむ
也又先年聞見せし中ニ都兒格といふ國の男
女遍鼻皆美容とす小児生れハ革の紐を以て鼻
の巻くおし平め地ありしと云る説信く常取

職方外紀前亞
墨利加伯西兒
條曰婦人其之
時鑿顯及平
唇作乳以猫
暗夜光諸室
石嵌入為美
那海國譯說
曰婦人唇類
ニ乳ニ穿チ
玉石骨筒ノ
美ヲ嵌ス其
状甚怖レハ
レトアリコ
等ニテ見レハ
アメリカ地方
ノ風習有リ

さるといふ云れも鼻は軟骨なり自由と云ふ云々
又伊勢の國白子の漂客大黒丸充左最神漂者也
北亞墨利加の属島「アミシヤツカ」といふ所の婦人
小児の時より鼻と腮を穴に穿ち齒を齧るも
筆の軸の大ききを削り長さ二三寸かけし
ありしと云ふ云々又此の腮は二本鼻は二本ぬき出
し云れを女の化粧といふ云々又此の腮は
丸に穿ちしと云ふ云々又面頬と手の甲は
入墨代を穿しといふ云々此等皆同日の俗あり
の怪異捧腹堪へし
我國の女子正配の儀は鉄胎多るる齒牙潔め
眉毛剃り髪すといつのはけしうのたらし

兩夫は見人ぬ夢ひありといふあり此も異物
の人々、怪しむる事ありや又清國の輕近の風俗
を以て婦人纏足の法の一奇といふ也
先考呂宋の扇嶋「ハタン」ガ、ヤン、カ、といふ所の漂
流し、者の説法ときくは彼諸島の大樹地を以て男
女平生を裸あり、且禪杖を首に懸け、前足の指す
の毛有り婦人、本條の糸を結き、機織織の
糸も、毛も、いと、いと、の毛有り、いと、いと、本條の機織織の
取つて、織る。多擗布、長き七八尺を有り、其
前、いと、いと、料、いと、いと、幅、長あり、といふ、赤身
地あり、糸の用、いと、いと、糸、いと、いと、いと、いと、
いと、いと、いと、いと、思ひやり、いと、いと、大、いと、いと、いと、

萬國人物風俗之不同不可窮盡矣抑夫紅毛碧瞳螺
髮黑身及昂鼻長乳大小長短則得之天然無論已若
其風俗則固出人為而奇異萬端文身被髮左衽髀形
至其甚鑿顛樹骨角孔唇嵌寶石自昔眎之麟趾固兩
誰不驚走而彼就其中論妍評強畢竟耳目之所慣視
以為常耳支那之俗往古自誇稱中國職視他邦動言
蠻夷、々、而婦人裹脚男子亦已髡頭鼠尾 本邦剃
鬚方額婦人剃眉黑齒昔謂彼麟趾固兩者彼眎亦猶
昔唯改羅巴之俗男婦皆養胎髮不纏脚不染齒不失
天真者也余特笑近時都下婦人點唇用油胭脂金翠
如孔雀翎毛夫傅粉所以助其白點脂所以添其絳而
用脂之過度却為金翠色抑何所取義乎靜而思之無

眉黑齒金翠唇居我一怪物錄諸瀛溼槎中人豈有不
驚愕者乎 壬戌春晚書此
盤石老兄博祭 月池桂瑞

阿蘭陀通事の譯鳥鬼等の物語をききしごとくといふ
話流の中は印度地ちよとて専ら阿片を薰服す
夕而何うされけ商と家多し 薰服の管數箇所
其動又居へ去る人の来り服するは信の圖の中載す
くされ服すれ 一時精神昏憤の状を何らつ
及よハ心志爽快身體堅固とて夜眠氣を生せし
遠行等自在まの如し 存 一度ふれ所服すれ
思想しとて已止みりし物れとも其服科言價よ

負人ハあつて用ひらるる一度の料救 形ハ一方金
程からんといふ盗賊のわらわのとも人の金銀盗
とて彼阿片舖多あり 長服を食むるもの多し 故
罪科犯せり尋むる等 芳味のまきしを阿片如く行け
ハ必を捕獲するといふ「ブキスルんといふ地ちよ」
鳥鬼^{ニロンゴ}白引^{カトワカシ}形(高也)迹如んといふものハ生者と欺
き阿片舖(連水)行く處といふハいさみ悦ぶ者
やつておれ所奪ひ来り何うとそ習俗といふもの
嗜好の動き怪しくむ色し 洋船^{ナラシ}は意以来り鳥鬼
の中^ニ去りし(到)ては百く阿片を服せりとい
何うとや今後は天下西より来り吃烟の勢執何り
さるの地ちよ其流傳り甚きすなり奇といふ處をいす何

代版するの風習といふなり又奇中の奇といふ處
又南^ノ西^ノ方^ノ熱^ノ國^ノ地^ノも^ハ多^ク鳴^クを^モ王^ノ族^ノ
士^ノ庶^ノといふも^ハ平^ノ常^ノ撫^ノ拂^ノ子^ノ也^ト南^ノ方^ノも^ハ葛^ノ葉^ノと^カア^ノ時^ノ
灰^ノと^ハ併^ノせ^テ嚙^ノむ^ノあり^ト此^ノれ^ハ瘴^ノ癘^ノの^ノ氣^ノに^ハ避^ノる^ノ者^ノ
あり^ト又^ハ國^ノ黨^ノの^ノた^ノめ^ノあり^トも^ハい^ハハ^ハ南^ノ方^ノの^ノ俗^ノ
智^ノの^ノ奇^ノ異^ノの^ノ事^ノあり^ト

天竺^ノ地方^ノも^ハ七^ノの^ノ垂^ノ珠^ノ（^ノ元^ノを^ノ穿^ノち^テ金^ノ環^ノを^ノあ^ノけ^ノる^ノ）
秋^ノ帳^ノ夷^ノ地^ノも^ハ汗^ノか^ノり^ノ一^ノを^ノ又^ハ婦^ノ人^ノ夫^ノと^ハい^ハハ^ハ口^ノ
の^ノ思^ノ（^ノ點^ノま^ノり^トを^ノ古^ノ來^ノの^ノ風^ノ俗^ノと^ハ見^ノる^ノあり^ト）
人^ノ相^ノ手^ノ經^ノ相^ノとい^ハハ^ハ唐^ノ山^ノは^ハ始^ノり^ト我^ノ國^ノの^ノ何^ノの^ノ事^ノ也^ト
思^ノひ^トは^ハ改^ノ羅^ノ巴^ノも^ハ互^ノに^ノ羅^ノ旬^ノと^ハい^ハハ^ハ井^ノシ^ノラ^ノゴ^ノフ^ノと^ハい^ハハ^ハ
和^ノ蘭^ノゲ^ノレ^ノント^ノケ^ノレ^ノル^ノス^トとい^ハハ^ハ相^ノ學^ノあり^ト手^ノ理^ノを^ノ見

白^ノを^ノ「^ノハ^ノン^ノド^ノケ^ノレ^ノル^ノス^ト」^トい^ハハ^ハあり^トト^ハ者^ノも^ハ何^ノ」^トウ^ノゲ
ラ^ノール^ノ「^ノオ^ノール^ノセ^ノツ^ノケ^ノル^ノ」^トい^ハハ^ハあり^ト

遊^ノ雲^ノが^ノ蘭^ノ語^ノも^ハ「^ノス^ノオ^ノー^ノ」^トい^ハハ^ハバ^ノタ^ノヒ^ノア^ノ」^トも^ハ毎^ノ度^ノ
互^ノに^ノあり^トと^ハ蘭^ノ人^ノ物^ノ種^ノ

小^ノ見^ノハ^ハ諸^ノ骨^ノ皆^ノ脆^ノ軟^ノあり^ト出^ノれ^トも^ハ少^クし^ト漸^ク長^ク者^ノも^ハ
の^ノ理^ノ何^ノの^ノ二十^ノ年^ノも^ハ及^ノば^ノい^ハハ^ハ諸^ノ骨^ノ皆^ノ脆^ノ軟^ノあり^ト堅^ノ剛^ノ
と^ハあり^トと^ハ西^ノ洋^ノの^ノ書^ノも^ハ見^ノる^ノは^ハ才^ノ力^ノも^ハ人^ノの^ノ二十^ノ五^ノの^ノ曉^ノと^ハ
て^ハ才^ノ力^ノの^ノ少^クし^トい^ハハ^ハ智^ノの^ノ少^クし^トい^ハハ^ハ暗^ノは^ハ窮^ノ理^ノの^ノ説^ノと^ハ左

日^ノ古^ノの^ノ書^ノも^ハ極^ノ老^ノの^ノ人^ノ齒^ノ牙^ノを^ノ落^ノし^ト存^ノ又^ハ新^ノと^ハ更^ノ生^ノ
せ^レ日^ノ多^クし^ト「^ノヘル^ノモ^ノレ^ノキ^ノユ^ノス^ト」^トい^ハハ^ハ先^ノ哲^ノの^ノ撰^ノ（^ノの^ノ書^ノ中^ノ）
男^ノ女^ノ在^ノ一^ノ帯^ノも^ハ見^ノる^ノは^ハ中^ノ二十^ノ三^ノ年^ノも^ハあり^トる

老翁更生せる所見「ト」又「左アニユス」といふ人の説
は万葉の老翁「何れ」と又「ト」トバルトルニユス
といふ人の説は能首の齒百四十歳とし歯牙更生
せし其属の者中より「ト」トワシといふ人の撰
書は百爾西亞の國府は齡三百五十歳とあり齒牙
兩度まで脱落し又生へり其三度目は生る齒牙
「ト」堅硬のより「ト」も「ト」彼運材負控り壯
夫の如しと云余も往昔「ト」何れ「ト」トムべといふ
地の古碑は勅「ト」れりといふ
獨度奴斯の本草を没食子に譯せしは物「ト」榎木
の枝葉と云其の葉作「ト」し球形法成せるものあり
此は「ト」つき「ト」洗「ト」すは物「ト」は「ト」戦軍荒業流行病

との三山は知らるる前兆と云ふより「ト」球形刺し試
むと蠅を吐くも此は戦争の兆とす又一小蟲蠢
動し行ひ出ると「ト」荒業の葉あり「ト」知らるる又小蟲
群行ひ出ると「ト」疫癘流行るるの前兆とす「ト」氣
作らば「ト」出ると「ト」見ゆるは「ト」草木生
植より「ト」出ると「ト」秋涼の氣あり「ト」河水枯らるる「ト」時海より
川へのわたり来ると「ト」不寶磨む奥羽飢饉を
く「ト」五月の内川の鱈のわたり「ト」網「ト」は「ト」
知らるる老く「ト」荒業あり「ト」果して
大荒業あり「ト」氣候は「ト」は「ト」果して
第十七八の時法菴先生の説「ト」

意大里亞といふ國より硫黄の差白糖細くして上好
なりとのと貴く得たりと其硫黄の好むる黄色か
らしめられ何首飾とありといふ風習怪しむるに
アテルウラツトといふ人乃撰く白書中硫黄の條
にありけり云々
和蘭地方の人と醫の白粉は極く白く差を粉といふ
あれ、銀白銀鑿を見ゆるものなりとありあり羊
着て七ゆりやく糖を人の好くは見ゆる代書とす
白風俗とすは至極好ハイルプーテルといふハ
イルを醫ありプーテルハ粉あり

佛骨舍利

佛の體中の舍利といふものありといふあれ人の國より

手足指節間より互に細粒界あり人の和漢の群書に未
云及は在りとのあり大西解剖諸書に因説より羅向
にありけり「オツサセサモイデア」といふ和蘭に在りト
ペーニキニスと名く種子様小骨の義あり余これ重
訂せる解體新書に顆粒界と譯す其因所見り
形のありの如し「手の五指界の機關間有細骨名顆粒
骨又足趾骨本為細骨あり此顆粒骨あり日古登
といふ人の説所見り顆子骨の本希間より所在して支
節の動搖所輕便なり」とあり又顆粒骨の説は
顆粒骨細くして圓き小骨あり其形尖り種子顆
粒に似たり古本解剖者流の説は四十顆あり人五
といふ指の節節間より又足趾は二顆あり又或は十

二顆見出せるは、又壯年の人、二十顆あるもの
 見たりといふ、但身軀他部は、何れもよく多く、
 中指の骨は、二ツ、細指の骨は一ツ、又示指と腕骨
 の末骨との間は一ツ、又大指の骨は、二ツ、腕腕段の散子骨
 の間は一ツ、斷骨の端顆骨の所は、二ツ、何れも、何れも、
 一ツ、諸骨の選著は、出せるもの多し、正時細指の
 骨二顆の表は、近き所は、一箇、且大指の骨一骨の上
 には、一ツ見出せるも、其を、茂實己は、譯定するもの
 あり、即ち、抄出する、浮屠火藥の中は、これより、何れ
 出、舍利と名け、るは、何れも、や、元庸の人、これを
 火藥せむもの、何れ、附け、は、必し、見出せる、或る、
 日、何れも、或る、癖、在、鮮、答、あり、
 日、何れも、或る、癖、在、鮮、答、あり、

石首鳥の頸骨は、石は、石、奥は、限ら、る、諸、骨、何れ、
 此、何れ、の、骨、や、の、堅、剛、何れ、の、骨、か、人、の、骨、
 具、何れ、の、耳、底、は、耳、の、骨、何れ、已、は、西、方、の、石、骨、の、石、
 耳、諸、骨、の、生、族、何れ、の、骨、か、所、必、し、耳、底、何れ、
 第、の、蘭、麻、摘、草、何れ、の、録、を、

